

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳(その五)

鈴木 満 訳・注・解題

お断り

編著者ルートヴィヒ・ベヒシュタインに関しては、鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳(その一)」(『人文学会雑誌』第四〇巻第四号、二〇〇九・三月)の「まえがき」を(一)参照ください。

なお、目下のところ底本としては

ヴァルター・シエルフ^(一)の注とあとがき付きで、ルートヴィヒ・リヒターの一八七葉の挿絵が入った下記

Ludwig Bechstein: *Sämtliche Märchen*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1972.

と共に

ハンス・ライエルク・ウター^(二)編の下記

Ludwig Bechstein : *Märchenbuch*. Nach der Ausgabe von 1857, textkritisch revidiert und durch Register erschlossen. Herausgegeben von Hans-Jörg Uther. Eugen Diederichs Verlag, München 1997.
 をも用いている。

これは *Ludwig Bechstein Märchen* として二巻本。第一巻が DM B (一八五七)。ただし挿絵は一切無い。第二巻は ND M B。「世界の民話」*Die Märchen der Weltliteratur* (略称 Md W) シリーズの一つである。共に簡単ながら、古語、方言などドイツ語圏の一般読者にとって難解な語彙一覧が、収録された昔話番号別(メルヘン)に付いている。また、シエルフ注釈テキストには稀ながら存在した誤植が、こちらでは訂正されている。また、Md Wの方針に従い、全ての昔話(メルヘン)の注中に A T 番号とそのタイトル (A T の英語タイトルではなくドイツ語で) が必ず示されている。

ただし、注自体はシエルフ注釈テキストの方がずっと詳細なので、両テキストを相互に補完させるのがよろしかろう。

ちなみに訳文中の「 」内、その他の部分の「 」内は訳者の補足である。

訳注・解題略記号凡例

- A T アンティ・アールネ／ステイス・トンブソン編著『民話の語型』Antti Aarne / Suth Thompson : *The Types of the Folktale*. Suomalainen Tiedakatemia. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 1964.
- A T U ハンス・イェルク・ウター著『国際的民話の語型』Hans-Jörg Uther : *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. 3 Vols. Academia scientiarum Fennica. Helsinki 2004. A T の増補改訂版。
- B P ヨハンネス・ホルテ／ゲオルク・ホリーフカ編著『K H M 注釈』Herausgegeben von Johannes Bolte / Georg Polivka :

Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim 1963.

- D M B** (一八四五) ルートヴィヒ・ズビグムタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein : *Deutsches Märchenbuch* (1845).
- D M B** (一八五七) ルートヴィヒ・ズビグムタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein : *Deutsches Märchenbuch* (1857).
- D S** グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』 Brüder Grimm : *Deutsche Sagen*. 第一巻(一八一六)。第二巻(一八一八)。
- E M** クルト・ランゲ創始/ロルフ・ヴァルヘルム・ブローニョ編『ドイツ昔話百科事典』 Begründet von Kurt Ranke. Herausgegeben von Rolf Wilhelm Brednich zusammen mit Hermann Bausinger : *Enzyklopädie des Märchens* : *Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*. Walter de Gruyter, Berlin [u. a.] 1977.
- H a** ハンヌ・ズビトルト=シュトロイプ編『ドイツ俗信事典』 Herausgegeben von Hanns Bächtold-Sträubli : *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*. 10 Bde. Walter de Gruyter, Berlin / New York 1987.
- H d M** 『ドイツ昔話便覧』 *Handbuch des deutschen Märchens*. 25のやゝ1巻のみが一九四〇年発行された。EMの前身。
- K H M** グリム兄弟編著『ドイツ家庭のための昔話集』 *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. 初版 第一部(一八一二)・第二部(一八一五)。決定(第七)版(一八五七)。
- M d W** 「世界の民話」 *Die Märchen der Weltliteratur*. Begründet von Friedrich von der Leyen. Herausgegeben von Kurt Schier und Felix Karlinger. Eugen Diederichs Verlag, Düsseldorf-Köln.
- N D M B** (一八五六) ルートヴィヒ・ズビグムタイン編著『ドイツ昔話集』 Ludwig Bechstein : *Neues deutsches Märchenbuch* (1856).
- V d D** ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』(一七八二-一八六) Johann Karl August Musäus : *Volksmärchen der Deutschen*. 5 Teile.

六五 黄金きんの小さな星をつけた男の子たち

昔むかしうら若き伯爵がいた。とつても美男だったけど、これまで恋なるものを味わったことがなく、母夫人や友人たちの、結婚しなければ、という小言こごんについてぞ耳を貸さなかった。しかし城下の村をお忍びで歩き回り、若い衆や娘たちが糸紡ぎ部屋いと紡ぎでしたり、歌ったり、しゃべったりすることをそつと見聞きするのを楽しみにしていた。こうしたある時、伯爵自身を話題とする会話が聞こえた。娘らの一人が言うには「ああ、もしうちの伯爵様が結婚することになって、もしそのお相手があたしだったら、飛び切り美味しいお料理をあなたの方に拵こしらえてあげるんだけだな」。二人目が言うには「もしあたしだったら、あの方の子どもたちをほんとにきちんとお世話して育て上げるんだけだな」。「あたしはね」と三番目が言った。「もし奥様おくさまにしていただければ、あの方に可愛い坊やを二人産んであげるつもり。その子たちは胸に黄金の小さな星をつけてることでしょうよ」。他の娘らはどつと笑ったが、伯爵の方はいろいろ思案に耽りながら、城へ引き揚げた。

翌日伯爵は三人の娘らを呼びにやらせた。で、彼女たちは昨日お互いに伯爵が妻をもらうとしたらどうするかについてしゃべったことをもう一度全部繰り返さねばならなかった。三番目は長いこと拒み続けた。なにせ恥ずかしかったのでね。でもとうとう自分の思い切った望みを打ち明けると、伯爵は優しく乙女の手を取って、こう言った。「あなたの言葉通りの男の子を二人産んでくれるなら、そなたをわたしの妻にしよう。でもそうならなかったら、わたしは鼻で嗤わらってそなたをこの城から追い出してしまうよ」。娘は承諾した。だって彼女は明るい性分だった上、かねてから伯爵を心中ひそかに慕っていたものだから。それから婚礼が行われたが、伯爵の母親はこれがないとも気に喰くわなかった。さて、数箇月経つと若い伯爵夫人に懐妊くわいじんの兆きざしがあったが、伯爵は遠国おんごくに出かけねばな



④
らなくなり、奥方が出産したらすぐにその旨手紙で知らせてくれるよう、母親に頼んだ。こちらは猫をかぶって嫁女をちやほやしていた。

分娩の時が迫り、若妻は二人の可愛い男の子を産んだ。この子たちは胸に黄金の小さな星をつけていた。産婦は精も根も尽き果てたので、長いこと気を失っていた。意識を取り戻して、子どもたちは、と質すと、こんなことを告げられたのだ。産まれたのは不細工な猫どもだったので、水に漬けて殺してしまった、と。これを聞いて身も世もなく嘆き悲しんだが、それに続いた不幸はもつとひどかった。彼女は物乞いの女かなんぞのように、嘲りの声を浴びせられて城を追い出されたのだ。哀れんでくれたのは下僕がたった一人。この男はこっそりこう打ち明けてくれた。あなた様がお産みあそばしたのは、胸に黄金の小さな星をつけた二人の綺麗な男のお子たち。籠に入れられて、これは猫だから水に投げ込むように、と

の命令で自分に引き渡されたのですが、籠を開けたところ、罪もない赤子が可哀そうでたまらなくなり、育ててくれ、とあるおばさんに預けました、と。放逐された奥方は悲嘆のうちにもこれを聞いて大喜び、同情してくれた召使に何度も何度も礼を言うのと、急いで子どもたちの許に向かい、人目につかない寂しいところで何年も一緒に暮らした。

男の子たちはすくすく育ち、ますます可愛

らしくなった。哀れな妻は夫を偲び、あのひとがこの子たちを目にしたら、邪よこしまなその母親の仕打ちをすっかり償ってくれるでしょうにねえ、と考えた。するとこんな夢を見た。十字路の脇に立っている大きな木のところに(5)行け。木の下に亜麻あま仁にが(6)一山ある。これで隠カサトしを一杯にするがよい。けれどそれ以上取ってはいけない。そうしてそれからポルトガルへ行くのだ。そなたの夫はその地である女魔法使い、(7)というか妖精フェアリーというか、そうした者の愛の網かちに絡め取られている、と。妻はその木の許に行き、亜麻仁を見つけ、それで隠カサトしを一杯にした。森の中で強盗に襲われ、身ぐるみ剥がれたので、一文無しになってしまい、それから先は物乞いして生きて行かなければならなくなり、足は傷つき、血が流れた。こんな惨めな境遇ながら再三夢に慰められた。夢は、最後には成功する、と約束してくれた。ある時のこと美しい館の門口かどぐちで、どうぞお恵みを、と頼んだところ、館の奥方は妻が連れている子どもたちを見、いかにも可愛らしいのにひどく心を打たれ、哀れな妻に向かつて、どちらか一人譲ってたもれ、その代わりいかような望みでも叶えましょう、と申し出た。子どもの一人を失うのは哀れな妻にはとても辛かったが、それでも結局は承知して、引き替えに丁度奥方がその前に佇たまたんでいた小さな黄金きんの足踏み糸繰り車(10)が欲しい、と言った。奥方はそんな要求を訝いぶかしく思ったが、それでも糸繰り車を差し出し、二人の男の子の片方は奥方の許に残された。哀れな妻は先へ先へと旅を続け、とうとうまたしても二人目の男の子と別れを告げなければならなくなった。その子の代わりに貰ったのは小さな黄金の手回し糸繰り車(11)。この二つの貴重な道具を大事だいにしまひ込み、妻は苦しい旅路を続けた。

のべつまくなしの艱難かんなん辛苦しんくのあげく、やつとのこと(12)でポルトガルに到着、夫が住んでいる館にやって来た。館の召使たちの話では、ご主人様は結婚なさっておられるが、奥様のお顔を見た者はだれもない、なにしろ館にいるのは夜の間だけ、昼間はどこへ行くのかだれも知らない、とのこと。太陽が沈むと、妻は館の庭園に忍び込み、伯

爵夫人の部屋の窓の下に腰を下ろすと、足踏み糸繰り車を回したので、車は夜の闇の中で星のように輝いた。さて、伯爵の奥方である女魔法使いは妻のところへやって来ると、この風変わりな玩具のことを問い質した。妻は、お願いを一つ聴いてくださいますなら、これは贈り物に差し上げます、と答えた。その願いとはつまり、相手の夫の傍で一夜過ごさせて欲しい、というもの。女はこれをなんとも妙だとは思ったが、とにかく承知した。けれども、こっそり伯爵に眠り薬を飲ませた。そこで伯爵は一晚中目を覚まさず、傍らにいた妻はがっかりして夜が明けるのを見た。夜が明けると女魔法使いは妻を迎えに来た。でも次の宵、妻はまたまた館の外に坐り、黄金の手回し糸繰り車を回した。女魔法使いはまたやって来たが、同じ願いを聴き入れなければならなかった。今度はしくじって十分強い眠り薬を伯爵に盛らなかつたので、夜が明けないうちに伯爵が目を覚まし、痩せ衰え、窶れきつた妻が傍らに在るのを見てびびくりした。妻は夫に胸の思いをありつたけぶちまけた。これを聞いた伯爵は子どもたちがなんともいとおしくて堪らなくなり、妻に、改めて自分の奥方として認める、と約束した。それから、妖精がやって来て、妻をそこから連れ出す時、眠っているふりをした。さて、伯爵は妖精に向かつてこんな話をした。こんな奇妙な夢を見たのだよ。ある男だがね、これが判断を間違つて妻を追いつけ出してしまう、他の女性と結婚した。けれども元の妻は命と美貌を犠牲にしてその男を探し求めた。その妻が夫を見つけ出したとしたら、夫はどうすべきだろうか、という夢なのだよ、と。「でしたらその方は二度目の奥さんと別れて、信実のあるそのひとのところへ戻らなくては」と妖精。「そなたは自分で自分に審判を下したのだ」と伯爵が応じて、何が起こつたのか一部始終を物語った。そこで妖精は悲しく切ないながら身を引き、伯爵は、子どもたちを請け戻してから、信実のある奥方ともども故郷に引き揚げた。伯爵の邪な母親は二度と再び息子の面前に姿を現さなかつた。伯爵は奥方をこよなく大切にし、あの同情心篤い召使にはたっぷり礼をした。黄金の星をつけた男の子たちは成長して両親の喜びとなり、大

胆不敵な勇士として幾多の合戦に参陣、勝利の勳いさおを贏かちえたのだった。

解題

フランケン地方の口承。

ヨーロッパで最初にこの類話が見られるのはジョヴァンニ・フランチェスコ・ストラパローラ『楽しい夜夜』Giovanni Francesco Strapalora: *Le piacevoli notti* (一五五〇—一五四) 第四夜第三話。後にドーノア夫人の「王女麗しの星」Mme d'Aulnoy: *La princesse Belle-Etoile* によって広く知られるようになった。KHM九六「三羽の小鳥」*De drei Vögeln* との似寄りも指摘しておくべきであろう。なお後者はおそらくアレクサンドル・セルゲーヴィイチ・プーシキンの民話詩「サルタン王とその息子、誉れ高く遅しきクヴィドン・サルターノヴィイチ公と世にも麗しき白鳥王女の物語」の素材。ガラン訳の『千一夜物語』にある (Partzade-Erzählung)、とのことだが、未詳。

A T 七〇七 「三人の金髪の息子」The Three Golden Sons.

原題 *Die Kraben mit den goldenen Sternlein.*

六六 杜^ね松^ずの木

解題

A T 七二〇 「母さんがぼくを殺した、父さんがぼくを食へた。杜松の木」 My Mother Slew Me : My Father Ate Me. The Juniper Tree.

原題 *Der Wachholderbaum*
K H M 四七 「杜松の木の話」 Von dem Machandelboom に相当するため訳出せず。

六七 白い狼

ある王が狩をしようと馬で大きな森に分け入ったが、そこで迷ってしまつてね、幾日も幾夜もあてもなくうろつく羽目になり、どうしてもちやんとした道が見つからず、餓えと渴きに苦しんだ。やつとのことで出逢つたのは黒装束しよんぐくの小人だが、王はこれに道を訊ねたもの。「ご案内して送り届けて差し上げましょうがな、あなた様の方もそのお礼にわしになぞくださらねば。お宅に戻られて最初に出くわすものをこちらにおよこしにならなくてはなりません」と小人。王は嬉しがって道道こう言つた。「小人よ、そなたは全く感心だの。まっこと、わしの一番の愛犬がわしを迎えに走り寄つてまいても、喜んで褒美にそなたに遣わそう」⁽¹³⁾。しかし小人はこう答えた。「そちらの一番の愛犬なんぞわしは欲しくはございません。わしが好きなのは別のもの」。さて二人が城に近づくと、王の一番末の姫君が窓からお父様が馬で戻つて来たのを見つけ、はしゃいでびよんびよん駈けて来た。こうして娘に抱き締められた王は「やあ、これはしたり、一番の愛犬



が迎えにまいればよかったのに」と言った。これを聴いて王女はとつても驚き、泣きだしちゃってこう叫んだ。「なんですって、お父様。私より犬の方が可愛いのですか。犬がお迎えにまいった方が嬉しかった、とおっしゃるの」。王は息女を慰め、「ああ、いとしい娘や、そんなつもりで申したのではないのだ」と言い、ことのしだいを一切物語った。でも姫君はびくともせずにいわく「いとしいお父様が深い森の中でひどい死に方をなさるよりこの方がずうつとよろしゅうございます」。すると小人はこう言った。「一週間したら連れに来る」。

一週間経つとほんとうに一頭の白い狼が王城に来た。そして王女はいやおうなしにその背中に乗らなければならなかった。それから、ほつほう、それ進め、藪だろうが原っぱだろうが、上り坂だろうが下り坂だろうがおかまもなく、どんどこどんどこどこまでもまっしぐら。王女は狼にまたがっているがもうもうやりきれなくなつて「ねえ、まだ遠いの」と訊いたのさ。——「黙れ。硝子の山^{ガラス}まではまだまだなんとも遠いのだ。——黙っていないと放り出す」。それからまたもずんずん進む。とうとう王女は可哀そうにびくびくおすおす、またしても、まだ遠いのか、と訊いたのさ。すると同じ脅し文句を狼は言い、どんどんずんずん駈けて行く。とうとう王女が思い切つて三度目にまた訊いた途端、狼は王女をすぐさま背中から投げ落とし、さつさと走つて行つちやつた。

さてさて哀れな姫君は昼なお暗い森の中に独りぼっちになり、歩きに歩いて考えた。なんとか人間のいるところに辿^{たど}り着けないかつて。するとやつこのことで一軒の小屋に出くわした。そこには小さい火が燃えていて、歳を取つた小さな森おつか⁽¹⁴⁾が坐り、火のわきに小さな深鍋を据⁽¹⁵⁾えていた。「おばさん、あなた、白い狼を見ませんでした」と王女が訊いた。——「うんにゃ、見なんだ。それは風に訊かなきゃなるまい。風はそこいらじゅうで訊き回つてるからのう。ところでまずまあちよいとお坐り。そうしてあたしと一緒に食べなね。ちよつぱり⁽¹⁶⁾鶏汁を煮ているとこだで」。お姫様がその通りにして、鶏汁を食べ終わると、婆様は「おまえさん、鶏^鶏の小骨を持ってお行

き。これにやうまい使い道があるだろうよ」と言い、それから風のところに行く道筋を教えてくれた。

風の許に王女が着くと、風もやっぱり火の傍に坐り、鶏汁を煮ているところだった。けれども白い狼の行方を訊かれた風は王女にこう返辞した。「好い子ちゃん、わしはそんなの見てはおらん。なにせ今日は一度も外出せんじゃったでな。のんびり休養しようと思つたのじゃよ。太陽に訊いてご覧。あれは毎日昇ったり沈んだりしとる。が、まずわしのようにくつろいで、疲れを休めるがええ。そうしてわしと一緒に食事をしなさい。そしたらおまえさん、食べた後鶏の小骨を皆持つてける。これにやうまい使い道があるだろうよ」。

これが済むと、女の子は太陽のところに出掛けた。そこでもまた風のところで全く同じだった。太陽はやっぱり傍らで鶏汁を煮ている最中、そこで話は手っ取り早かつたが、こちらもやっぱり白い狼を見ちゃいなかった。で、姫君と一緒に食事に誘つた。「あなたね、月に訊いてみなくっちゃ。だつてどうやらその白い狼は夜にしか走らないようですもの。夜のことなら月はなにかも目にしてるわ」。王女は太陽と一緒に食事をし、小骨をすつかり集めると、旅を續けて、月に訊いてみた。月も鶏汁を煮ていて、こう言つた。「そいつはやっかいだなあ。わたしは晦日みそかには照らさなかつたしな、昇るのが遅過ぎたこともある。白い狼についてちゃあ何一つ知らん」。少女はしくしく泣き始め「ああ、ああ、それじゃだれに訊けばいいんでしょ」と叫んだ。——「まあ辛抱、辛抱、お嬢ちゃん」と月。「飯食う前には踊りにゃならぬ」⁽¹⁷⁾「腹が減つては戦はできぬ」。坐つて、まずわたしと一緒に鶏汁を食べなさい。そうして小骨も持つてお行き。うまい使い道があるだろうよ。それにわたしはこんな話も知つているのだ。その黒装束の小人は硝子の山にいてね、今日婚礼を挙げるのさ。月の中の男もこれに招待されている」。「あら、硝子のお山、硝子のお山。私、ほんとはそこへ行きたかつたんです。だつて白い狼はそこへ私を乗せてくはずだつたんですもの」と王女は大声を出した。「それじゃあね、そこに辿り着くまでわたしがきつと照らしてあげよ



う。道案内もしてあげる」と月が言った。「さもないとおまえさん、あっさり迷ってしまいうだ。なにしろたとえばわたしなんぞは体全部がそっくり混じりけなしの硝子の山山でできてるのだから。さあさあ、おまえさんの小骨を全部ちやあんと持って行くんだよ」。姫君はそうした。だけど慌てたものだから、一本だけ小骨を忘れちゃったんだ。

まもなく王女は硝子の山の麓にやって来た。でも、この山、どこもかしこもつるつるすべすべで登ることができなかつた。けれども王女は年取った森おつかあと風と太陽と月に貰った鶏の小骨をそっくり取り出して、それで梯子はしこを拵こしらえた。これはとつても長くなつたが、うわあ、やれやれ大変だ、おしまいのたつた一段が足りなかつたのさ。そこで姫君は小指の先つちよを切り落とし、それをうまく使つたので、さつさと硝子の山のとつべんに登ることができた。上には大きな穴が開いていて、立派な階段が下に通じていた。なにかも絢爛けんらん豪華で、大広間は婚礼のお客たちで一杯、楽士がたくさんおり、ご馳走がたつぷり並んだ食卓が数数あつた。それからそこには例の黒装束の小人が坐っており、その隣には女の人がいた。これが小人の花嫁だつた。でも、黒装束の小人は悲しそうな様子。そこで王女もとっても辛くなつた。自分の到着

が遅過ぎたのと、小人がとっても悲しそうなのが、辛くて辛くて堪らなかつた。それから胸の裡でこう考えた。私、白い狼の唄を歌おう。そうしたらもしかして私のことを思い出してくれるかも、と。——だつて、小人はまだちりりとも王女の方を見なかつたので、王女がだれだかも分からないでいたから。さて壁際にハルフェ（20）の堅琴が一台立っており、姫君はこれを上手に弾けたので、それを手にしてこう歌つた。

「そちらの一番の愛犬なんぞわしは欲しくはございません、

わしが好きなは別のもの、

一番末の王女様。

白い狼駆けてつちやつて、

どこに行つたか分かんない、

一番末の王女様」

小人ははつと聴き耳を立てたが、姫君はなおも演奏と唄を続けた。

「狼の跡を追い掛けて、

指の先つちよ切り落としたの、

一番末の王女様。

やつて来たけど、あなたには分かんないのね、

この唄をせつなくあなたに歌うのは

「一番末の王女様」

すると小人は座席からぱつと立ち上がり、突然こよなく綺麗な若君の姿になり、つかつかと王女に歩み寄ると、両腕にぐつと抱き締めた。

なにもかも魔法だったのさ。この若君は魔法でもって年取った小人に、あの白い狼に、変身させられちゃって、硝子の山に封じ込められていたわけなの。どこかの姫君がその許にやって来るために小指の先つちよを犠牲にするまでずうっとね。でも、もしある期間、そうしたことが起こらなかつたら、若君は別の女の人と結婚して、生涯黒装束の小人でいなければならぬところだったんだ。さて、こうして魔法が解けると、もう一人の花嫁は姿を消し、呪いから救済された若君は王女と結婚、それから連れ立って王女の父親の許に向かった。父王は息女に再会できたことを心から喜び、死ぬまで皆一緒に幸せに暮らした。でも万一死んでいなくなつたら、いまだに生きてるってこともまずまあるかも知れないね。

解題

ベヒシュタインはこの話を(DMB一七、三六、三七もしかりだが)、カール・ミュレンホッフ(一八一八―一八四)編『シュレスヴィヒ、ホルシュタイン、ラウエンブルク諸公国の伝説、昔話、民謡』Karl Müllenhoff: *Sagen, Märchen und Lieder der Herzogtümer Schleswig, Holstein und Lauenburg*, Kiel 1845, IV, 7. から採録した。

A T 四二五「消えた夫を採す」The Search for the Lost Husband, A T 四二五 A「怪物(動物) 婚」The Monster (Animal) as Bridegroom.

原題 *Der weiße Wolf*.

六八 儉約家^{しまりや}あにいと浪費家^{つukaiや}あにい

昔むかしあるお百姓が息子を二人持っていた。で、お百姓は二人に手仕事を習わせた。「なにしろな」とお百姓。「手仕事ちゆうもんには黄金^{きん}の土台があるだで」。息子の一人は靴職人になった。もう一人は仕立て屋さん。で、徒弟奉公の年期が明けると旅修行⁽²¹⁾に出た。この連中、二人ながら好一对の暢気^{のんき}ぼうずだったが、靴職人の方は有り金残らず煙管^{パイプ}煙草^{たばこ}や嗅ぎ煙草⁽²²⁾、それから火酒^{シユナップス}に遣い果たしてしまうのだった。だが仕立て職⁽²³⁾はというと、煙管^{パイプ}はやらない、嗅ぎ煙草も嗅がない、火酒^{シユナップス}なんぞ飲みゃあしない。ときどき、とにかく儉約^{けんやく}しなよ、と兄弟に忠告したが、靴屋はそれを笑い飛ばしていわく「いったいなんのためにおいらに儉約^{けんやく}しろって言うんだ。あんたは儉約^{けんやく}すりゃあいい。儉約^{しまりや}家^やにや浪費^{つukai}家^やがつきものさね。諺⁽²⁴⁾にあるじゃないか」。

この愉快な職人衆はこんな具合に丸一年連れ立って旅歩きをした。仕立て屋は一つ特別な財布を用意して、兄弟が無駄金を遣うたんびに、万一の時の蓄え用の、たっぷりあったことは一度もない、二人共同の会計から丁度同じだけこれに入れた。これを丸一年やり続け、そのちいぢやな財布のぼんぼんがだんだんふくらしていくのを嬉しがっていた。

さて兩人、ある時またしても儉約と浪費について口争いをおっぱじめた。仕立て屋が貯め込んだお宝を自慢すると、靴屋は「あんたが貯めたものなんざ、ろくなことにならんさな」と言い返したものだ。そうこうするうち、とある橋に差し掛かったが、欄干の上には立派な、幅が広くて滑らかな石が敷かれていた。そこで仕立て屋は、儉約は良いものだってことを兄弟に呑み込んでもらおう、とした。だって、ほら、諺⁽²⁵⁾にもあるよね、備えあれば憂い無し⁽²⁶⁾、って。それからさ、蓄財に励め、若者、年老いて窮迫するは哀しきものぞ。二人は背囊を下ろし、仕立て屋は



自分のちいぢやな財布を取り出すと、長いこと持ち歩いたのですっかり赤味がかってしまつたすてきなグロツシエ
ン銀貨(27)とゼクサー銀貨(28)を何枚も数え、橋石の一つの上に並べた。これはかなりの金額だったので、仕立て屋はほく
ほく喜んだ。靴職人の方はその様子を我関せずで眺めやると、煙管パイプに煙草を詰め、火打ち道具で火を打ち出した。(29)
丁度その時猛烈な一陣の突風が吹いて来て、橋に欄干が無かるうものなら、ちっほけな仕立て屋さんのこと、その
まま川に吹き飛ばされるところだつたかも。でも、お金の方は風がな
にもかも水の中に攫さらい落としてしまつた。仕立て屋はびっくり仰天し
て立ちすくんだままだつたが、靴屋は火口ほくちの火を煙管パイプに押しつけ、世
にもどかな顔でこう訊いたもの。「なあ、おい、儉約家しまりやあにいよ、
で、あんた、いくら貯まつたんかね」。仕立て屋はしゃくりあげて泣
きわめいた。「同じおんなこつたい、あんたと——とほほほ(31)。同じおんなこつた
い、あんたと——とほほほ」。

解題

口承。

短い話に幾つもの諺。ベヒシュタインの好みである。こういう軽妙な主題だと、
とりわけベヒシュタイン一流の活き活きした語り口の面目躍如たるものがある。
結びは子どもたちに受けることを狙つたのだろう。普通ベヒシュタインの物語で
も高く評価されている倫理を笑いものにしてのおふざけだが。

A T 該当無し。

原題 *Bruder Sparrer und Bruder Vertuer.*

六九 菊戴きくいたたき

昔むかし一人の爺様が森の中のちっぼけな家に住んでいた。何人も子どもがいたが、他に一羽の菊戴(32)を持っていた。菊戴というのはヨーロッパで一番小さい鳥で、鶺鴒みまぎらの仲間なんだ。だれにも好かれるこの小鳥を爺様はとつても愛いとしがっていたし、子どもたちも負けず劣らず可愛いとがった。さて、爺様、今わの際になると、子どもたちにこう言ったもんさ。「いいかの、この菊戴は売ってほならんぞ。こりゃ幸運の小鳥だから」。けれども爺様が死んでしまつと、この子どもたちのちっぼけな家は困苦欠乏てのに見舞われた。さて、この菊戴、毎週豌豆えんどうくらの大きな卵を産んだ。色も豌豆みたいな黄色だった。これらの卵を爺様はどこかへ持つて行つては、金やら食べ物などを手にして戻つて来るのが常だった。ところで食べ物なくなつちやつたので、長男は、これまで産んだ卵を集め、それを売りに行こう、と心を決めた。ところが、男の子が幾つもの菊戴の卵を、売り物です、と並べると、大笑いされ、やつとこさ、この可哀そうな腹へこのぼうずを気の毒に思った一人の男が同情してプフェニ(33)と銅貨二、三枚で買い取つてくれた。この錢を遣い切つちまうと、以前にも増してひもじくつて堪らなくなり、今度は卵をたつた一個持つただけでまた出掛けて行つたんだがね。この時は巡り合わせが良かった。若者が見つけた男は、父親がしょっちゅう卵を売っていた相手で、この男、卵の値打ちをちゃあんとわきまえておつたのだ。つまり、卵は皆純金でできていたのさ。さはさりながらこやつ、男の子が真相を何にも知らないのに気づくと、こうぬかしたものの。「わしにその卵をどうしろつて言うんだね。鳥の方を売りな。とつても好い値を払うつもりだよ」。そうしてすぐさま連れだつて森の小屋に向かった。他の子どもたちは一番上の兄が菊戴を男に売つたことを聞かされると、泣いたりなじつたりした。男はぴかぴかのターラー銀貨(36)を何枚か代金として卓テーブルの上に並べた。小鳥は籠の中でばさば

さ羽ばたいていらら動き回り、その様子は子どもたちには「ぼくを売らないで、ぼくを売らないで」で叫んでいのように思えた。でもやっぱり売られちゃったんだ。

こうした折、この国の王が亡くなるという事態が起こった。寡婦かぶとなった若くて綺麗な王妃は服喪期間が過ぎると、こんな布告おふれを出した。いわく、吊り下げられた王冠を目隠しをしたまま槍で突き当て、これを落とす方をわらわは夫とし、その方と玉座を分かち合いましよう、とね。その頃例の菊戴きくざいがしょっちゅうこう啼くようになった。「ぼくを食べる者は王様になる、ぼくを食べる者は王様になる」。菊戴を買った男はこれを聴いてほくほく喜び、そりゃあ食べてしまえば黄金の卵を諦めなければならなかったけれども、それでも小鳥を殺してしまい、羽を筆ひしらせ、炙り焼きにしてもちゃんと分かるように、派手な絹糸を結んで目印にした。それから料理女に、よくよくそれに気をつけるんだぞ、ときつく言いつけた。たくさんの友だちを宴会に招いておいたが、これは自分が鳥を食べて突然王様になったら、すぐさま臣従の誓いをさせよう、との魂胆からだった。

さて、この宴会のためにありとあらゆる準備が調えられている時、菊戴を売ってしまった男の子が哀れなその日暮らしの物乞いになってこの家にやって来て、料理女に何か施し物をお恵みください、でなければ麩麩かを一切れと頼んだ。すると料理女は「何かしらやるけどね、おまえの方も何かしなくちゃいけないよ」と言った。こちらも喜んでそれを引き受けた。若者は水運び、竈かまどの火のために薪を割り、平鍋の中で炙られていた鳥たちに気をつけた。この鳥の中にはあの菊戴もいた。少年がうっかり一本の薪を平鍋に突き当てると、菊戴がそこから駆け出し、真っ赤に焼けた炭の中に落ちた。

男の子はびっくり仰天したものの、わあ、この小鳥もつたいない、と思ひ、ひどく焦げはしたけれど、ぱつと口に入れて食べてしまった。それが以前自分の持ち物だった菊戴とは露知らず。料理女は台所に入ると鳥の数を数



え、一つ足りないのに気づいて、当てにならない新米の下働きのこぞうを悪口雑言を浴びせてそこから叩き出し、別の小鳥に急いで目印を付け、その料理をご主人のところを持って行った。主人は目印の付いた小鳥を平らげた。そうして今日ただいまでも相変わらず坐りこんで、王様になるのを待つておるよ。友だち連にさんざんご馳走しちまったのに腹を立てながらな。

追っ払われた少年はしょんぼりと街道筋を彷徨い歩き、とある粉挽きの家の戸口で物乞いをした。粉挽きは丁度驢馬追いが入り用だったので、この地位を哀れな若者にくれてやり、驢馬⁽³⁸⁾どもと一緒に厩^{うまや}で眠^ねつてもいい、と許した。するとね、なんと、粉挽きが翌朝敷き藁^{わら}の古いのを片付けて新しいのに取り替えた時、今度雇った驢馬追いが

眠った藁の中に黄金の卵を幾つも見つけたんだ。これをほくほく喜んだ粉挽きはこう考えた。この若造はぜひともずうつと引き留めておかなくちな。前のやつは糞野郎だったが、こいつは宝物だ、と。

さて、槍で王冠を突き当てる日が到来すると、驢馬追いは考えた。だれでも王冠を突くことが許されるんだったら、自分だつてやってみたい、と。で、粉挽きに槍を一本、馬を一頭貸して欲しい、と頼んだ。粉挽きは思いつきりげらげら笑ったが、こいつあつてもない冗談事だ、と思ひ、がりが

りに痩せているびつこの老いぼれ馬と古ぼけた槍をやり、王冠突き当てに若者を送り出した。

弱弱しい^{かろう}恰好のへんてこりんな騎士がどたどた馬を急がせて参着すると、だれもが噴き出したし、こんなにもみすばらしい若者が、すこぶるたくさん身分の高い騎士や貴顕が名乗りを挙げた王冠突きに割り込んで来たことに王妃はご機嫌斜めだったが、王冠突きへの参加をだれにも認めてしまっていたのだから、今更それを制限するわけにはいかなかった。

競技が開始され、まず一人の伯爵と一人の騎士が次に目隠しをして王冠を突きに掛かったが、いずれも成功しなかった。そして驢馬追いが見事王冠を突き当てて下に落とし、競技は終了。王妃は全くもっておもしろくなかったが、驢馬追いの奥方になるほか仕方ない。なにしろそう誓ちまっただからね。それから驢馬追いの主人の粉挽きだけど、その後はもう厩の寝藁の中に黄金の卵を見つけることはなかった。見つかったのはただ驢馬たちが生むああいっただけ。

王妃は氏素性が賤しいので背の君が一向愛しくなかったから、なんとか始末してしまおう、と昼も夜も思案した。そこで手っ取り早く術に長けた年寄りの女魔法使いに頼った。するとこの婆様、ある薬草をよこしたが、これには人間を動物の姿に変える力があった。邪な王妃がこの薬草を夫の食べ物に混ぜると、なんとね、王様はその料理を召し上がったとたん、変身し始め、それまで綺麗な青年だったのが驢馬そのものになってしまった。こういうしだいでは若者はさんざん罵られ、莫迦^{ばか}にされて宮廷から追い出され、他の者が王に選ばれた。賢明にも今度の選び方は運任せ、盲目の偶然任せではなかった。なにしろ驢馬風情が至高の位に登るのをまたしても見る羽目になるのが怖かったから。

哀れな元驢馬追いで今や驢馬そのものは、新しい境遇がいかに辛いのを身に染みて感じなければならなかつ

た。以前何の不満もなく驢馬を追ひ、寝藁の上で眠つた粉挽き小屋への道を辿つたが、若者がやって来たのを見た粉挽きは、他の驢馬たちと区別することができなかつた。もつとも、その目にはいくらか人間らしいところがあつたけれど。こうして若者は他の驢馬たちの仲間として粉挽き小屋の厩に置かれ、穀物や粉の入つた袋を年がら年中運ばにやあならなかつた。他の驢馬たちに較べこれっぽっちも良くも悪くもない暮らしさね。

さて、昔まだ人間だつた時この哀れな驢馬には妹が一人いた。⁽⁴⁰⁾この妹はその頃兄さんと別れて物乞いをして歩いてしたが、とある修道院⁽⁴¹⁾でも、麴麴をお恵みを、と施しをねだつたもの。すると、若くて達者な女の子なものだから、下働きの仕事に雇つてもらへた。この子は蔭日向なくせつせと励んだので、とうとう修道尼にさえなり、見込まれて門番の役を与えられた。さて、丁度その頃この修道院はご存じの驢馬がいる粉挽き小屋に製粉させたのだが、初めて袋を背に載せて

修道院の門にやって来た例の驢馬は、門番の尼僧が自分の妹だとたちどころに分かつた。なにしろまだ人間らしい物の考え方と記憶を持つていたからな。そこでイヤアア、イヤアアと高らかに嘶き、嬉しさを告げた。すると門番女の胸の裡にもこの驢馬に対して何かこう愛しいという気持ちがかみ上げて来た。これこそ自然の声と申すもの。ところでこの門番女はありとあらゆる薬草に通じていたし、自身修道院の菜園で最も上質で最も効能のあるものを栽培していた。⁽⁴²⁾そこで出掛けて行くと、もし魔術で変身させられていたのなら、動物の姿を再び人間に戻す力のある魔法の草を摘み、それを驢馬に食べさせた。すると驢馬は以前同様人間に還り、夥しく接吻をし、夥しく



涙を流して、優しい妹に感謝した。けれども若者は七年間というものの袋も咎もたつぷり頂戴したので、二度と人間の仲間入りをしたくなかった。優しく信心深い妹と巡り会った修道院の近くに木の枝で小屋を建て、敬虔な隠者にして森住まいの修道士になった。そこで草の根や野草を糧として暮らし、森の鳥たちの快い唄を聴いて楽しみ、餌をやったり世話をしたりした。ただし例外は菊戴で、これには我慢がならず、呪うのだった。なんしろその一羽のせいで災難に見舞われたのだから。そこで捕まえに掛かり、獲物が手に入りさえすれば殺した。

解題

テューリンゲンの口承。

ただし、テューリンゲンの都市イエナに住んでいた市井の学者ハインリヒ・テューリング Heinrich Döring (一七八九—一八六二)が編んだ『テューリンゲン年代記』*Die Thüringer Chronik* からベヒシュタインが採録、多くの細部を変更、語り口もより活き活きさせた、とのこと。

この話では魔法の鳥の役割がさほどはつきりしていない。特に貧しい若者が王女と結婚してからの第二部では大層混乱している。鳥の心臓を食べた者が毎朝金貨を授かるとか、人間を驢馬に変えるキャベツとそうした驢馬をまた人間に戻すキャベツのモティーフをうまく扱っている点では KHM 一二二「キャベツ驢馬」*Der Krautesel*の方がずっと優れている。主人公が妻である王女に裏切られて驢馬に変えられ、王宮から追い出されて苦難を味わった結果、人間の容姿を取り戻しても王女への復讐を考えず、人の世に幻滅して隠者となるとか、魔法の鳥と同じ種類の小鳥を目の敵にして、捕まえることができれば殺してしまうとかいう設定は民話の「常識」から背馳すること甚だしい。DMBでは珍しく推奨し難い物語である。

A T 五六七 「魔法の鳥の心臓」*The Magic Bird-heart*

原題 *Goldhähnchen*.

七〇 騎士青髯あおひげの物語メルヘン

解題

A T 三二二 「巨人殺しと巨人の犬」 「The Giant-killer and his Dog (Bluebeard)」.

原題 Das Märchen vom Ritter Blaubart.

七一 三人のとんな悪魔

昔むかし地獄でとつても妙ちきりんなことが起こったげな。地獄に来るのは男ばかりで、女は一人も来なかつたつちゆうわけ。男どもは、ここん中に女がいりゃあなあ、と心から思ったもんよ。すると一人のごく若造の悪魔がしゃしゃり出て、「賭けてもいいがね、おいら、一人連れてくらあ」とこうぬかした。他の悪魔どもはなるほど嬉しがりはしたが、こやつ科白をまともに信じはしなかつた。この悪魔、すぐさま出立し、他の連中は大成功を祈つてやる。こうして地面に出て来ると、出くわしたのは一人のうら若いあまつこ。「いよう、姐さん、結婚する気はあるかなあ」とこやつ、言葉を掛けたもの。「もちろんですとも」と相手は返辞した。「あたくしでしたら明日ご婚礼でもいいですわ」。「おいらもそれでけっこうさ」と悪魔。で、明日という日になると、悪魔は牧師のそこへ出掛けてつて、このあまつこを女房にしてみらう。さはさりながらいちやいちゃ月が過ぎ去ると、若奥さんはお金やら着る物、それもすてきなのをねだるし、悪魔の方はろくすつば暮らしを立てることもできずで、しょつちゆう自分の食い扶持を削つちやあ、その分を女房に回す始末。そのせいでひよろひよろの瘦せつぽちになつてしまい、以前のようにご機嫌なことはもうずうつとありやしない。女房はもつともつこの色男から約束してもらつてたんだ——金をどつさり、すてきな着物を何着もつてね。だもんで、手始めはまず亭主の悪魔に冷たくなる。亭主は宥めすかす。ぶつくさ唸る。でも女の方はひどくきやんきやん責め立て、ぶつわよ、と脅かす。これにやあ悪魔はせせら笑つて、おいらあおまえをなんとか我慢できらあ、と考える。けれども亭主が一言やつつければ、女房は十言言い返す。こんなことが年がら年中続くんた。それからどうしたかつて。結局悪魔は猛烈にひつぱたかれたの。



そこで悪魔は思案した。やれやれ、なんだっておいら、こんな女房で苦勞せにやならんのだ。あつさり国に帰ることだ。てなわけだ——悪魔は引き揚げた。女を連れずに地獄に戻ると、他の悪魔どもはこやつをしたたかに笑いのめし、そこいらじゅうで「とんな悪魔、とんな悪魔」って叫んだ。でもね、こちらは「地獄全部をくれると言われたって、おいら二度と女なんざ要らねえ。おまえら、おいらが女を連れて来なかったのを喜ぶな。女がここに来ようもんなら、おいらたちだれにとつても地獄をますます熱くしちまったとこだ」と答えたもんさ。すると別のいくらか年上の悪魔がいうよう「今度はこのおれが行く。きつと一人手に入れて来る」。これも出立し、とある豌豆畑えんどう畑に出ると、娘だけれどもう年増としずみなのにいくわした。で、悪魔は考えた。「待てよ、こいつはそうあどけないおちゃっぴいってわけじゃない。だからこれを連れて行こう」。そこでこう声を掛けた。「なあ、おい、姐さん、結婚する気はあるかなあ」。——「あるわよう、あたしにくれるお金と食べ物を持つてるならね」。「持つてるとも」と悪魔。で、二人は婚礼を挙げた。そしたら女房は悪魔が嘘をついたのに気づいたのよ。だってな、こいつは

貧乏も貧乏、赤貧洗うがごとしつてくらしいの貧乏な悪魔野郎でな、何一つ持つちゃあおらず、何一つできなかつた。やつこさん、うちでこういう具合になつちまつた。⁽⁴⁶⁾ なにしるこやつ、とんだけちんぼうの山の神に関わり合つちまつたのよ。このごうつくばり、茹でじゃがいもには塩を惜しみ、日曜日、「教会で回される」鈴付きの献金袋にはヘラー銅貨の代わりに銅を放り込んだもんさ。⁽⁴⁷⁾ かみさんは亭主の悪魔に仕事はたつぶりあてがい、口に入れるものは僅かしかやらなかつた。もつとも口小言の方は欲しいだけ頂戴できたし、ひっぱたかれるのも珍しくはなかつた。ひもじくて腹が痛くて堪らなくなつても、舌がからからに乾いちまつても、かかあどんはだんつくを憐れんだりすればこそ。何か喰いたければ、悪魔は出掛けてつて、じゃがいもを拾い集めて来にやあならなんだ。⁽⁴⁸⁾ で、夕方でつかい袋一杯持つて帰らなかるうもんなら、またまた幾つかぶんなぐられた。年がら年中こんな具合。とどのつまり、悪魔はこんな暮らしにうんざりして、独り言。「やれやれ、なんだつておいら、こんな女房で苦勞せにやならんだ。おさらばしちまおう。なにしろこれじゃ最下等のけだものだよ」。家を出て地獄に戻る。地獄に着くと、かみさんはどこだい、とすぐに訊かれる。「はあ、かみさんねえ。もらつたよ。もうたくさんだ。上で一緒になつた女のこたあ、おれは生涯忘れねえ。あんなのをこの地獄に連れて来ると。あいつを厄介払いできて、おれは嬉しい」。そこでそこいらじゅう「とんまな悪魔、とんまな悪魔」つてことになつた。

さて、だけでも全く年を取つた悪魔がいわく「今度はわしが行こう。わしは女どもにたつぶり仕返しをしてやるわな」。——爺さん悪魔は出立し、地面の上に出る。白樺の若木の森を抜けて行くと、遠くに見えたは一人の女郎よ。これは後家さんでな、どうしてまだまだ色香たつぶりな様子だつた。男は女をとつくり眺める、女は男をとつくり眺める、それから懇懇な申し入れと愛想の良い返辭が交わされ、ご両人は取り引き成立の間柄とあいなり、牧師が連中を釘と鉄で留めちまつた。思う存分しつかり頑丈に。けれども婚禮が終わると、悪魔がよくよく得心した



のは、袋に入った猫を買っちゃあいけない、街道筋で後家さん(49)に求婚するもんじゃない、ってこと。女は手札をよつく心得ていた。(50)なにせ、聖なる結婚生活は初めてじゃなかったからの。粗食と井戸水なんてのはまだ序の口、殿方ならどなたでもいらっしやいませ、(51)って始末なんだけど、亭主はそれを黙って見てなさやならん。こいつはあんまりひどすぎた。こんな具合に拱手(こうじゆ)傍観(ぼうくわん)なんてのは悪魔(あくま)だって我慢できないが、女房は亭主を壁にぶら下げ(ぶらさげ)て「ほつたらかして」、恋人たちと麦酒(ビール)を飲みに行(い)つちまう。で、戻(もど)って来ると壁から下ろすんだ「いろいろ用(よう)を言(い)いつけるんだ」。それからやっこさん、猫を飼(か)わずに済(す)むように鼠(ねずみ)を捕(と)ることを覚えさせられる。けれどもこいつは悪魔(あくま)にだつてひど過ぎたので、逃げ出して例(れい)の森(もり)に入り込み——ても、おめおめ地獄(じごく)に引き下(ひ)がるのは恥(は)ずかしかったからな——

——草木(くさき)の実(み)を探(たづ)ねたが、この方が鼠(ねずみ)よりずうっと上等(じょうとう)。

こつやつて草木(くさき)の実(み)の中(なか)にいと、出(で)くわしたのは一人(ひとり)の炭(すす)焼き(52)で、悪魔(あくま)はこの男(おとこ)に窮(きゆう)状(じやう)を訴(う)え、何か食(た)べ物を恵(めぐ)んでくだされ、と頼(たの)んだ。すると炭(すす)焼き(53)はこつ言(い)つた。「なあ、爺(ぢや)様(さま)や、おらがとこにも子ども(こども)が七人(なな)いての、しょつちゆう食(た)う物(もの)に事(こと)

欠くだよ。——「炭焼きどん、真つ黒な御仁、一つ教えておくんさい。わしはどうしたら根情悪の女房に言うことを聞かせたものかの。何と引き替えにしてもいい、お願いじゃ、助けてくだされ」。

これに答えて炭焼きいわく。

「根性悪の女房は手酷い罰だて、

あら哀し、そんなの背負い込むやつは」

悪魔が思うよう「土台そんなもんなら、わしやあ国に帰った方がいいわい。最初っからうちにいたんだつたらなあ」。——で、女どもに復讐してやろう、と思案し、こう言った。「のう、兄弟、おぬしも貧乏人。わしはおぬしを金持ちにして進ぜよう。したが、わしの言う通りにしてもらわにゃならん」。炭焼き「ええともさ、なんとか金持ちになりてえもんだ。だからおら、あんたがやれつちゆうことをやるだよ」。そこで悪魔はこう言った。「ま、聴きなよ、炭焼きの兄弟、わしはある王を知つとる。この王にや姫君が三人ある。わしはこのうちの一人の体に潜り込むつもりじゃ。そしてな、おぬしは医者どんにならにゃいかん。わしが姫君の体に潜り込むと、王は、物狂いをするつぱり治してくれる医者を探す布告を出すだろうて。そうしたら、この王のところに行つて、こう言上するのじゃ。『王様、やつがれは姫君様をお助けできます。したがそのためには姫様と一つ部屋で二人つきりにならねばなりません。万端ご無礼なきように務めますのはもとよりでござりまするが』とな。で、おぬしが姫君の許に通されたら、わしに向かつて『ええこの悪魔め、出て行けえ』と唱え——窓を開けるがよい。わしはそこからおさばするでなあ。だが、こういうことは二度しかやつてはいかん。三度やろうもんなら、わしはおぬしの頸根つこ

をへし折らずにやおかん。」——「おらが綺麗で氣立てのええ女を見せてあげてもかの」と炭焼きが訊いた。悪魔は「見せてもらおうじゃないか」と応じたもの。でもこう考えてのこと。喜んでそう約束してやれるわい。そうしたって何の懸念もあるものか。むしろ悪魔は女つてものをよおく知つとる、と。——さてある日の夕方、炭焼きは森をあとにした。おかみさんがこう言ったのでな。「なあ、とつつあま、金持ちの王様がお触れ書きを出したがな。姫様が今もおつ死ぬちゆう病だ、うんだ、重病だ、と。助けてくれる者には王国の半分か、その医者どんと王様二人の目方と同じ重さの黄金を遣わす、だつてよ。もし、なあ、あんたが、とつつあまや、よく効く家伝の薬たらいうもんを心得とつて、その姫様をお助けできるなら、わたいら、この貧乏から抜け出せるかも知れねえだ。」——すると炭焼きは女房に「おら一遍試してみるべえ、もしかしたらうまく行くかもなあ」と返辞して——そうして出立した。王の許に参上すると、王はこう訊いた。「老人、そちは余の息女を健やかな身にできると申すのか。」——「さようでござりますとも、王様」と炭焼き。「やつがれはまず薬種商のところから幾つか薬剤を手に入れねばなりません、これは自分自身取りに参らねば。それから姫君様のお傍でたつた独りになる必要がござりまする。」これを聞いて王いわく「老人、そちのしたいようにするがよい。そちがわしの息女を健やかな身にいたしたら、王国の半ばか、余とそちの目方と同じ重さの黄金を遣わす」——炭焼きは悪魔に教えられた通りにした。すると姫君は即座に元氣になった。王が炭焼きに、黄金か王国か、どちらでも好きに選べ、と言うと、炭焼きは黄金を取った。

それから間もなく別の姫君が悪魔に取り憑かれた。王は炭焼きをまた呼び出して、こう言った。「老人、そちは初め病氣になった息女を健やかにしてくれた。これも同様に救うてくれい。」——炭焼きは「やつてみましょう、王様」と答えた。すると、ねえ、ほら、二番目の姫君も助けてやったので、王は炭焼きにまたしても同じ重さの黄

金を与えた。

こうして炭焼きはとっても金持ちになったが、それでも深く悩んだのだ。なにしろ、これで、女どもをこっぴどく苛めてやろう、と決心し、きつとそれから離れっこない悪魔を、もう二度と再び追っ払えなくなっちゃったのだからな。最初の二回が済むと、三度目には炭焼きは悪魔を姫君の体の中に置いたままにしとかなきやならんだ。さもないと頸根っこを悪魔がおっぺしよるちゅうんだから。そして、三度目に悪魔を追っ払えなければ、王が自分を死刑にするのをおめおめ認める羽目になるわけ。で、炭焼きは、なんとか三度目にうまく悪魔を騙くらかすことができまいか、ととつおいつ思案に耽った。

さて、三人目の姫君も病気になった。悪魔が体の中に潜り込んだもんでな。またまた王は炭焼きの爺さん呼び出して、こう言った。「のう、老人、そちが余の息女を救えなければ、そちを縛り首にいたすぞ」。これに炭焼きが答えていわく「いとも優渥なる国王陛下、一つ試してご覧に入れますが、それにはかように計らって戴かねばなりません。明朝早くに、この都中の氣立ても見目もよろしい乙女たちが一人残らず白い衣装を纏い、紅の飾り帯を肩から斜交いに掛け、髪を巻き毛にして、陛下にお仕えするお坊様がたご一同ともども集まって、お城の前に立ちましてな、それから乙女たちとお坊様がたが声を合わせて唱いながら、姫君様と並んだやつがれに山の上まで随いて参るのでござります。さりながらその中に断じて一人もおつてはならぬのは、そんなじよそこらにざらに転がっているあまつこどもとか、いまだにやきもき結婚したがっている年増娘たちとか、結婚場所を移らせたがっている〔再婚したがつている〕後家さん連。このことは陛下のお坊様がたによくよく厳しくご命令くださいまし。こうやって山のとっぺんに到着いたしましたら、一つ試してご覧にいきます」。これらの条件が叶うよう、王は大至急準備万端調えさせた。次の日の朝、城の前に大群衆が集まった。行列は山の麓へと向かい、やがて山頂に着く

と、炭焼きは唱えた。

「ええこの悪魔め、出て行けえ」

なるほど悪魔は姫君の体の中から出て来はしたが、炭焼きにこう怒鳴りつけた。「このいかさま野郎。約束を守らんのか。見てろ、これからきさまの頸根っこをおっぺしよってやるわい」。しかし炭焼きは言葉返してこう言った。「待ちな。おらたちの取り決めにゃあ差し控えの項目があるべえ。あんたはおらに指一本触れられねえだ。おらがあんたに綺麗で氣立てのええ女を見せてあげればの。まあさ、振り返って、とっくり眺めな」。そこで悪魔が振り返り、一人また一人と女たちをとっくり眺め、この女たちに自分は何もできないことをよくよく思い知った。こうなると地面の上にいるのが恥ずかしくて堪らず、山の神がおつかなくもなつたので、ぶわっと一発臭いおならをぶっぱなし、元来たように引き揚げた。

こうしてこの悪魔は地獄に帰ったわけだが、着くなり、仲間たちがだれもかれも、女を連れて来たか、と訊いたもので、一人も連れて来なかった、と答えると、またしても「とんまな悪魔、とんまな悪魔」ってことになり、悪魔のようなおふざけ、大騒ぎ、悪魔のようなげらげら笑いで、どんがらがっちゃうんとしんばたん、地獄全体が古びた壁みたいにくらぐら揺れてめりめりいった。てなわけあいで地獄にはいまだに女はおらん。悪



魔の年取った祖母様を除けばあくまでおらん。⁽⁵⁷⁾——それというのも女ちゆうものはごくごく氣立てがいいからだ。⁽⁵⁸⁾

解題

ヴェラ谷の口承。

二つの異なった部分から成る笑い話である。悪魔といえども女性に対しては三舎を避けるという前半はとりわけおもしろいが、男性だけの集まりで語られたのであろう。なお、「悪魔」という語の入ったドイツ語の慣用句が幾つも使われ、滑稽さを更に盛り上げているが、日本語に移すとすると、ドイツ語のそれに相当する適切な日本語の掛詞が思いつかず、最後を除き、ほとんど諦めざるを得なかった。

A T 一六四「穴の中に投げ込まれた邪な女」The Evil Woman Thrown into the Pit + A T 一六四 D「魔物と人間が力を合わせる」The Demon and the Man Join Forces.

原題 Die drei dummen Teufel.

七二 恩を忘れない動物たち

昔むかし一人の巡礼が田舎を旅していた。森を抜ける道を辿っていると、狼^{わな}の穴に行き会った。そして中に生き物がいるのに気づいた。覗^{のぞ}き込んでみると、人間——黄金細工師^{きんごん}だった——の姿が見えた。その傍には猿^まと蝮^{むじ}と山棟蛇^{やまかがし}がいた。この三匹ともうっかりこの穴に落ちてしまったのだった。巡礼は胸の裡^{うち}で「この可哀想な連中に憐れみを垂れねばの。まず人間をその仇敵^{あだかた}から救ってやろう」と考え、綱を一本穴の中に投げ込み、端をしっかりと片手に握り、黄金細工師を引き上げようとした。が、猿は素早く綱に飛びついて、ささっと攀^よじ登り、穴からびよんと飛び出した。巡礼が二度目に綱を投げ落とすと、山棟蛇がそれに巻きついて上がって来た。それから三度目には蝮が綱に縋^{すが}り、これまた日の目を見ることができた。この三匹の動物たちは巡礼の情けに感謝し、それからこう述べた。「あなたがわたしたちにしてくださったご親切に、なんとかお返しをいたすつもりです。この先わたしたちもの



棲^{すま}処^かの近くにお立ち寄りになることがあれば、力の限りお役に立ちますので、どうか当てになさってください。でも、ご用心を、と真心籠めてご注意いただきたいのは穴の底にいる人間のこと。なにしろ、生きとし生けるものなかで、あれほど恩知らずなのはおりませんから。このことをわたしたども、身に染みて教えられております。そこで、どうなさったらいいか、よくよくお考えになるよう、あらかじめ申

し上げておきます」。

こう言つて三匹の動物たちは巡礼に別れを告げた。さて巡礼は、人間は当然人間を助けなければ、と考え、またしても綱を穴の中に投げ込み、黄金細工師を外へ引き出した。黄金細工師は巡礼から受けた温情にいろいろ言葉を尽くして礼を言い、自分が住んでいる王都に着いたら、是非訪ねてくれるよう頼み、立ち去つた。

更に旅を続けているうち巡礼は王都の近くへとやつて来たし、猿と山棟蛇と蝮の棲処にも通り掛かつた。動物たちは喜んだ。そして猿はくたびれきっている巡礼に果実類と甘い無花果いんげくを運び、山棟蛇は巡礼がのんびり休息できるようにひんやりと気持ちの良い洞窟に案内し、巡礼が眠っている間見張りをしたので、この大きな山棟蛇が寝そべっているあたりへ近づこうとする者はだれ一人いなかった。さて蝮はというと、こっそり王城に忍び込み、そこで幾つかの黄金製の装身具を盗み、敬意の徴しるしとして巡礼に捧げた。けれどもそれらをどこから手に入れたのかは言わなかつた。巡礼は動物たちの許を出立すると、王都へ行き、黄金細工師を訪問し、蝮にもらつた装身具を見せ、買つて欲しい、と申し出た。黄金細工師はこれらが王の持ち物であることに気づいたが、それについては黙つたまま王の御前に参上、お宝を盗んだ者を私めの家に捕らえてあります、と注進し、その褒美としてたつぷり金子えんすを頂戴した。王が遣わした捕吏たちは巡礼を引つ捕らえ、ぶちのめし、通りを引き回して、町の外の絞首台へと連れて行き、縛り首にしようとした。途中老人は動物たちの戒めを思い出し、大きく溜め息をついてこう言つた。「ああ、おまえたちの忠告に従つていたらなあ、信実まことある動物たち、そうすればこんな災難に見舞われることはなかつたろうに」。

さて丁度処刑場に通じる道端に棲処を持つていた蝮は無実な男の嘆きを耳にした。その不幸の責任は自分にあつたので、悲嘆に昏くられ、どうしたら老人を助けてやれるかあ、と思案した。すると王子が、これはうら若い少年だつ

たが、盗人が死刑になるのを見物しよう、とやって来たので、そこへ這い寄って、その片足を咬んだから、足はた
ちどころに腫れ上がった。そこで居合わせた人びとは皆びっくり仰天、なんとか命を助けようと、医師たちと占星
術師たちが大至急呼びにやられた。医師たちは蛇の咬み傷に効くとかねてから推奨されている薬剤のテリアカを持
参したが、これは一向役に立たなかつた。だが占星術師たちは星占いをし、死刑に処されようとしている巡礼が無
実であることを知ったし、少年王子自身、はつきりした声でこう叫んだのだ。「あの巡礼をわたしの許に連れて参
れ。あれが手をわたしの傷と腫れに置けるように。そうすればわたしは癒されるのだ」と。

そこで巡礼が王の御前に連れて来られると、王は、そちはいかなる運命の持ち主か、と訊ねた。巡礼が王に対
し、自分が死から救った善良で恩を忘れない動物たちと黄金細工師のこと、黄金細工師のあさましい忘恩沙汰をな
にもかもありのまま申し立てた。そして両手と両眼を天に向かって上げ、こう懇願した。「おお、全能の神よ、こ
のわしがかの盗みをしたのが真に濡れ衣でありますなら、このわしの手は真にこのかたを癒すでしょう」と。――
そしてその途端に王子は健やかになった。これを目の当たりにした王は心も晴れ、喜びで一杯になり、巡礼を讃え
て数数の高価な贈り物を下賜し、巡礼が死の恐怖を味わう原因となった装身具も全て授け、それからなんともひど
い、憎むべき恩知らずの罰として黄金細工師をその場で縛り首の刑に処した。

解題

DMB五六「鼠ザンパールの身の上話」と同じく、ベヒシュタインが専ら依拠したのは「古の賢者たちの諭し、金言、その他」
Der alten Weisen Exempel, Sprüche, etc. (フランクフルト・アム・マイン、一五九二)なる書籍、つまり古代インドの教訓寓話集
「パンチャタントラ」の翻訳である。詳しくはDMB五六の解題参照。

A T 一六〇「恩を忘れない動物たち、恩知らずの人間」*Gratfel Animals: Ungrateful Man.*
原題 *Die dankbaren Tiere.*

七三 四人の利口な旅の仲間



昔むかし四人の旅の仲間がいた。全くの偶然で道中で出会い、一緒に旅歩きをしたものだ。四人のうち一人は王子、二人目は貴族、三人目は商人、四人目は手職人。四人とも金と来たらこれっぽっちもない。金持ちでも貧乏人でも旅をしているとよくあることだが。体に纏まとっている衣服以外は何一つ持たず、財布の中は空っぽだった。さてある大きな王の都に近づき、ひどい空腹を感じると、どうやって金と食べ物を手に入れるものかねえ、という問題が持ち上がった。するとこう言ったのは王子。「出したいだけ意見を出してみようではないか。そうすれば神様がお定めになった道がおのずと開けよう。それに信実まことの希望を籠めて神様にお縋すがりする者は見捨てられることはない。」⁽⁶⁵⁾商人いわく「用心深さと分別が組めば全てを乗り越える。」⁽⁶⁶⁾貴族が言うよう「力強く姿形の美しい若さは更に価値がある。」⁽⁶⁷⁾これを聞いた旅歩きの仲間、これは手職人だった

が、こう述べた。「あつしのお粗末な頭で考えたところじゃ、こうだなあ。実行のともなう心配りが最善ぞ、とね」⁽⁶⁸⁾。

こんなことを語らいながら四人の旅の道連れは夕方都の近くに辿り着いたが。市門の外で一休みした。この時他の三人が四人目の道連れに、旅修行の職人⁽⁶⁹⁾に向かってこう言った。「あなたは何よりも心配りを讀えたなあ。一つ出掛けて行って、わたしら四人が今夜食べ物⁽⁷⁰⁾の代金を払えるように、心配りをしてくれないか」「やってみよう」と職人は答えた。「あんたがたがそれぞれ、あつしら皆の役に立つように、自分の標語通りやってみるならね」。道連れたちがそれを約束すると、職人は都に入り、四人の男が一日お腹一杯になれるほどの金を稼ぐには、一人の男は何をしたらいいいものか、とつらつら考えた。と、教えられたのは、薪運びほど儲かるものはない、ってこと。なにしろ、薪は高く、森は遠く、都の人たちはおつくうがりだ、というわけ。そこで男は急いで森に出掛け、薪を集めてでつかくて重い束を一つ拵え、これを担いで都に運び、代金としてプフェニヒ銀貨を二枚稼ぎ、それで自分と仲間たちのための食べ物と飲み物を買ひ込み、一同が泊まることになった旅籠⁽⁷¹⁾の扉に有頂天になって白墨でこう記した。正直者の心配りは力を使って一日にプフェニヒ銀貨を二枚稼いだ、と。

次の朝、三人の仲間たちは四人目に、貴族に向かってこう言った。「さあ、今度はあんたが今日わたしらに食べ物⁽⁷²⁾の世話ができるかやってみせておくれ。それには、あんたの美しさと若さの力と、それから他にあんたのわきまえていることを役立たせてね」。貴族は都に出掛けたが、心中こう考えた。「わたしは働くことなどできないし、したくもない。他にも何をやったらいいか思いつかない。そうかといって、空手で道連れたち⁽⁷³⁾のところに戻るなんてのは恥だしなあ」。こう悲しい物思いに耽りながら、ある家の円柱の傍に佇んだ。旅の仲間たちと寂しく別れることにしよう、という気になって。すると一人の若くて美しい、金持ちの寡婦⁽⁷⁴⁾が通り掛かり、貴族の若若しく端麗な容姿を目にし、どこから来たのか知りたくなり、女中をやって、客に招き、その身の上を聴き取ってから、一緒に

楽しみ、袂たもとを分かつ時にプフェニヒ金貨(7)を百枚はなむけに贈った。こうして貴族はどっさり食料を手に入れて市門の外のみすばらしい旅籠りやどにいる仲間たちの許もとに引き返し、戸口にこう書いた。花も盛りの若さを用いたある男は一日に百枚のプフェニヒ金貨を手に入れた、と。

三日目になると、三人は商人に向かつてこう言った。「今日はあんたが出掛けて行って、分別と組んだあんたの用心深さでわたしらしくこうな一日と願ったり叶ったりの食料を手に入れておくれ」。そこで商人は出発、海辺にあるこの都を通り抜けて港へと下りて行った。折しも港には一隻の商船が錨いかりを下ろしており、商人たちがその船の船主かみねに挨拶をして、積み荷を訊ね、取り引きをしようとしていた。しかし、船主があんまり高値を付けたので、商人たちは折り合えなかった。そこで一同は互いに「わしらは今のところこれ以上一文いちもんも高く払えない。ちょっと経てばあちらは吹っ掛けたのを悔やむだろうて。品物はそれだけの値打ちがあるがな。そうなくても、わしらは外のだれも船荷を買おうなんて奴はおりやあせん」と言い合い、船主の許を離れて行った。さて一方貧乏な商人だが、これはさる裕福な商人の息子だった。船主に近づくと、素性を明かして父親の名を名乗り、積み荷全部をグルデン金貨五万枚で買い取った。間もなく商人たちがもう一度引き返して来たが、一同どうしても品物が必要だったので、買い手にグルデン金貨五千枚の儲けを付けて、積み荷の購入額を支払った。かくして若い商人は心浮き浮きとして仲間たちの許に戻り、道連れたちの書き込みが既に記されている扉にこう書いた。用心深さと分別のお蔭である人間は一日にグルデン金貨五千枚を手に入れた、と。そして仲間たちと一緒に豪華な祝宴を開いた。

次の日の朝、三人は王子——その生まれについては皆知らなかつたのだが——に向かつてこう言った。「なあ、お仲間さん、今度はあんたが出掛けて行って、食べ物と飲み物を稼いで来る番だ。神様があんたとあんたの信実まことの希望に何をお恵みくださるか、やってみるがいい。そして素晴らしい結果になりますように」。

そこで王子は都へと出発したが、思うよう「わたしはどうしたらいいだろう。わたしは職を習ったことはない。若さ・美しさも持たない。父親に裕福な商人がいるわけではない。そして利口でもなければ用心深くもない。ただ神を信じまいらせるだけだ。そして神はわたしをお助けくださるだろう」。王子は都大路の道端の石に腰を下ろし、悲哀に満ちた物思いに沈んだ。

ところでこの王都では王がまたしても亡くなって、この日遺骸が都から郊外のある修道院に運び出されるところだった。人民は全てその行列に随行したものだ。だが王子はかつて味わった逆運をとつおいつ深く考えていたから、身の回りに何が起こっているのかとんと気づかず、王の柩を運ぶ行列が差し掛かった折、つい起立しそこなった。するとこの無礼を憤慨した一人の乱暴者が詰め寄って来て、王子の頬に一発平手打ちを喰らわせ、坐っていた石から突き落として、こう言った。「こんちくしょうめ。きさま、だれもが涙を流しているってえのに、王様のお亡くなりになったのを悲しいと思わねえのか。とつとと失せろ」。

王子は黙りこくって行列が去るのを見送ったが、これがまた戻って来た時、やはり石の上に坐り込んで、悄然と瞑想に耽つていた。そこで例の乱暴者はまたまたかんに腹を立てて近寄り、がみがみ怒鳴りつけた。「さつきも言つて聞かせたろうが、きさま、ここにいちゃあいけねえんだ」。そして捕吏たちに合図して、王子を地下牢に投げ込ませた。けれども獄舎の中で王子は、神がお救いくださるに違いない、とひたすら希望で一杯だった。さてその後人民が、先の王は跡継ぎを残さず崩御したので、新王を推戴しよう、と集まった折のこと。例の乱暴者が、自分は男を一人地下牢に入れてある、こやつはどうも謀反人らしい、公開訊問をして、判決を申し渡そうではないか、と告げた。そこで囚人は全人民の前に立たされ、いかにして、またなにゆえこの国にやつて来たのか、と訊ねられた。囚人いわく「実を申せばわたしはある王の子息なのだ」——こう言いながら父の名を挙げて——「父

が死去したので、王国はわたしに帰した。しかし、わたしの弟に付き従う徒党の方が多かったので、弟はわたしを王位から追放した。そしてわたしは、弟がわたしを弑逆するのでは、と憂慮せざるをえなくなり、父から受け継いだ遺領を捨て、この国にまいったのだ」。

これを聞いた人民の中にはこの王子の父君の名を知っており、その王国を旅したところのある男たちが大勢いた。彼らは、その王は公明正大で敬虔なひととなりで、その長男もまた敬虔で立派な人物だ、と言明、何人かが「万歳、国王万歳」と叫ぶと、他の者たちも「万歳、国王万歳」と叫んで、王子を自分たちの主君に推戴した。そこで王子は高高と担ぎ上げられ、この国の風俗習慣に従って喝采を浴びながら都中を、それから都のぐるりを連れ回された。こうして群衆とともに、自分が旅の仲間たちと泊まっていた、その扉に道連れたちの三つの標語が掲げられているあの近在の旅籠の傍に来た王子は、その標語をつらつら眺め、その脇にこう記すよう命じた。勤勉なる心配り、力強き若さ、用心深き分別、そして善きにつけ悪しきにつけ人間の出逢うもの、人間の授かるこれら全ては神の御許より出るなり、と。

一同は新王の資質に感嘆し、推戴したことを喜び、かかる主君を自分らに送らたもうたのは神であることを知った。さて、玉座の間に案内され、王座に坐ると、王は旅の仲間たちを迎えにひとをやり、王国の全ての貴族、全ての賢者、そして大広間に入れる限りの全ての人民を周りに集め、こう述べた。「王の王たるかた、神は頌むべきかな。してその聖なる御名に感謝しまいらせん。余の愛する道連れたちは、我らの一步一步をお導きになるのは神であることを信じなかった。されど今となつては余を証としてそれを認めねばなるまい。と申すのも、余が王位に就くのに役立つたのは、勤勉な入念さと結びついた肉体の力でも、若さの力と容姿の端麗さでも、はたまた商才と知恵でもなかったからだ。余はおのが弟によって国を追われたあの日からさような栄誉高位に関わることを決して望



まなかつた。余はこの地へ貧しい身で、巡礼の衣を纏まとつてまいつた。されど余を導きたもうたのは神の御手にして、余を高きに据えたもうたかたは、我が心が信実まことの希望を籠めてお縋すがりした神だったのだ。」

この言葉が終わると人民の中から一人の男が立ち上がって、こう言つた。「おつしやることを伺い、我らようやくあい分かりました。おお、王よ、陛下がいかにかこの王国に相応あはせしいおかたでいらつしやるかが。神が陛下にそれだけの叡智と分別をお与えになられたのですから。我らは賢明な王であられる陛下とともに良き助言を受けることになりましょう。なぜなら、かかる賢明な王の信実まことがお仲間たちの許に導いたのはゆえなきことではありませぬ。その御身に誉れと賞讃のあらんことを」。諸人もろびとが歓喜してさう唱和すると、王は言葉を継いでこう述べた。「国を追

われた折、余は身分を知られぬままさる貴族にしばし仕えた。しかし、仕事を辞めようという気になり、給金を受け取る段になつた時、身につけた衣服の代価として支払わねばならなかつた分を差し引かれて、僅かプフェニヒ銀貨二枚しか残らなんだ。そこで余は心中こう考えた。「プフェニヒ銀貨一枚は神に捧げよう。そしてもう一枚はどうしても入り用なものに使おう」とな。すると一人の鳥屋に出逢つた。この男、雉鳩きじばとの番つがいを市いちに売りに行くところだつた。そこで余は、生き物を死から救い出すに勝る神への奉仕はない、と思ひ、二羽の鳩に値を付けたところ、鳥屋は二羽を一プフェニヒで売ろうとはしたがらなんだ。そこで

余は胸の裡うちで考えた。一羽を捕らえられたままにしておけば、二羽は別れ別れになってしまふ。これでは鳩たちにとつてこれ以上はないひどい仕打ちだ、と。そこで二羽の鳩の代金としてプフェニヒ銀貨を二枚とも渡し、鳥たちを広い畑へ連れて行って放してやった。すると二羽は一本の野生の梨の樹の大枝に止まった。余はその下に佇み、再び立ち去ろうとしたところ、一羽の鳩が伴侶に向かつてこう言った。『この人間はわたしたちを死から救ってくれた。そしてあらん限りの身上しんじょうをはたいてわたしたちの命を買い取ってくれた。わたしたちはこの人間に感謝してお返しをする義務がある』とな。それから鳩たちが余に呼び掛けて告げるには『あなたはわたしたちに大層なお情けを掛けてくださいました。そのお返しを差し上げるのはわたしどもの務めでございます。この樹の根元に莫大な財宝があります。掘ってご覧なさい。そうすれば見つかります』と。余は掘り、宝を見つけ、それをしまいこみ、神にお礼を申し上げ、氣立ての良い鳩たちをお守りになり、その身を全ての悪しきことどもからお救いくださるようお願いした。それから鳥たちにごう言った。『けれどもね、おまえたちの知恵分別がごうも大きいなら、その上おまえたちは飛べもできるのだから、いったいどうしてわたしがおまえたちを買い取るようになったあの男の手に落ちたのだ』。これに應えて二羽の雉鳩けいこたちが言うよう『そうお訊きになるなんてなんと賢いこと。ご存じないのか。鳥の飛翔しり、のる鹿かの速さ、牡牛の強さは宿命あるいは神の定めに対しては何一つ能あたわぬということ。どんな被造物でもそれから身を守ることはできません。わたしたちのような種類の生き物であれ、人間であれこの地上では神の摂理から逃れることは叶いません』とな。

王が貴族たちと人民たちに、自分がどのようにして安らぎに満ちた神への信頼に到達したかを説明し終わると、改めて褒め讃えられた。それから王は旅の仲間たちに対し、近くに来るよう招いた。そして貴族を宮廷かしんの頭立かみたちった職の一つに任命、商人には王国の歳入を司らせ、手職人を産業部門の長ちやうとし、こうして彼ら全ての聡明さ、分別、利口さ、そして神への信頼によって幸せが打ち立てられたのであった。

解題

ベヒシュタインが素材を得たのは、DMB五六「鼠ザンパールの身の上話」、DMB七二「恩を忘れない動物たち」のそれと同一。
A T 該当無し。

原題 Die vier klugen Gesellen.



七四 熊の皮を着た男ルーパート

昔むかしがっちりした体格の若者がいた。この男、世間様をなにくそとばかり睨みつけ、だれかれなしに喧嘩を吹っ掛けたもの。そういううしだいで兵隊稼業に入り、勇猛果敢に敵とやりあったが、とうとう講和が結ばれて、兵隊連にお暇が出され、一同、そこから来たところへ、でなけりやそのほか行きたいところへ行くがよいということになった。そこでルーパートは、おりやあ兄弟たちのところへ行こう——ても両親はもういなかったんで——と考えた。そしてまた戦争になるまで、彼らの許で厄介になるつもりだった。けれども兄弟たちはこう言った。「戦争を待つてるやつなんぞにここに居坐られてたまるか。へえへえ、おまえは待つがいいわさ。わしらは戦争やら軍人やらにはてんから関わりたくない。わしらがほしいのは無事安穩だよ。おまえがなんとか戦争を切り抜けたってえなら、平和なご時勢もなんとか切り抜けな。まあ聞きな、おまえの領分は扉の外な

んだよ」。で、兵士のルーパートは兄弟たちに「きげんようも言わないで、自分の鉄砲をおつ取って、またしても世間に出て行つた。そうしてとある大きな森の中に来たが、こう独り言。「大胆不敵な若者の戦人をこうやって平和の最中にうちやるなんてあきれたこつた。なにしろおれつちのうちこの世で平和と折り合いをつけられるようなやつはありやしねえもんな。おりやあどうしたって戦が入り用だ。いちゃもんをつけてやれるような相手が来ねえかなあ。よしんばそいつが悪魔そのものだっていいや」。ルーパートはこう考えながら、銃に装填した。それも火薬を二倍に、弾丸も二個込めての強力な装填だった。その時一人の大柄な男が森の中をルーパートの方へやって来た。男は赤い雄鶏の羽根を挿した黒い鏢広帽を被り、鷹の嘴のように曲がった鼻で、燃えるような赤髯を生やし、緑色の狩猟上着を纏っていた。そして「どこから来たんだ、お若いの」と訊いた。——「あんた、それを訊いてどうしようってんですかい」とルーパートはぶっきらぼうに返辞。なにしろ最初で最上の「ゆきあたりばつたり」の、いや、最初で最悪でもかまわない、どっかのやつに「いちゃもんつけたくつてうずうずしてたんでな。「へっへえ、そんなにそつげなくするなよ」と鏢広帽と赤い雄鶏の羽根の緑装束は叫んだ。「足りないものがあるなら、助けてやれるが」。「おれに足りないのはいいちいいいもの、金でさあね」とルーパートは答えた。「おぬしに勇気があれば、金はたつぷりくれてやるぞ」。「勇気だつてえ。なにをこりやまたしゃらくせえ。え、旦那、おれに勇気がねえなんてどこのどいつがぬかした。兵士のおれに勇気がねえだと。悪魔みてえに勇気があらあ」。「振り向いてみな」と緑装束が言う。そこでルーパートが振り返ると、後ろに立っていたのは一頭の熊。犀のように巨大で、かつと口を開いて唸ると、後足で突っ立ってルーパート目掛けて進んで来た。しかしこちらは銃を手に取り、狙いをつけ、「てめえ、嗅ぎ煙草が一つまみ欲しいか。じゃあ一つまみくれてやろう」と言うなり、二重装填の弾丸を熊の鼻面に撃ち込んだ。その射撃孔から弾丸が脳まで貫通、そこで熊は躍り上がると高い唸り声を挙げ、ばったり倒れ

て、くたばった。「でかした、でかした。見たところ、おぬしにやあ勇気があるわい」と赤い雄鶏の羽根を挿した
 罽^{カシ}広帽の緑装束。「おぬしの欲しいだけ金をくれてやろう。だが、条件が一つある」。

「そいつを聞かせてもらおうかね」とルーパートが言ったが、こちらは自分が何者にかかずらわったのかとづく
 に気づいていたのだ。だつてね、相手の長靴の片っ方の採寸をした靴屋はどうやら、馬に長靴を作るみたいに
 突拍子^{トウバシ}もない大きさにしたのだから。「まあそれがあの世での幸せ^⑩に関わるつてえなら——まことにもつてありが
 たいお話ながらごめんこうむりましょ」とルーパートは続けた。

「この莫迦者^{バカモノ}」と森の狩人。「おぬしのあの世での幸せなどこのわしになんの用がある。おぬしはそれを手放すに
 はおよばん。そんなもの、わしには一向に値打ちはない。いいや、わしの条件とはこうだ。これから先七年、おぬ
 しは体を洗つてはならん。髪に櫛^{ハシ}を入れてはならん。髯^{ヒゲ}を剃^そつてはならん。爪を切つてはならん。寝台で眠つては
 ならん。主^{フアーク}の祈りを唱えてはならん。ま、どっちみちこりやおぬしの戰場^{いくさば}稼^はぎやお呼びはないこつたが。その
 代わり、わしはおぬしに上着と外套をやるが、今後七年間というもの身につけるのはこれつきりでなきやいかん。
 この期間が経たぬうちにおぬしが死ねば、おぬしはわしのものよ。生き長らえればわしはおぬしに手は出さんし、
 その後も後も金をやる。またなんでも好きなことを始めればいい。そしてわしはおぬしを元通り綺麗に磨き上げて
 やる。それもわしの舌を使ってな」。

「ふうむ、それだけ全部をあんだ、一つの条件つていうのかね」とルーパートは訊いた。「おれにやあほとんど一
 打^{ダイス}もあるように思えるな。が、まあいいや。おれは試してみるよ。試すは学ぶに勝る^⑪。「百聞は一見にしかず」、つ
 てえからなあ」。「決まりだ」と悪魔は言うなり、緑の上着を脱ぎ捨てると、大層素早く死んだ熊の毛皮を剥ぎ取
 り、こう言葉を続けた。「これがおぬしの上着、それからこつちがおぬしの外套兼布団だ。上着の隠^{カゲ}しに手を突っ

込みさえすりやあ金がある。そしてこの熊の皮だが、おぬしはこれを見るんだから、『熊の皮を着た男』だな、おぬしは。これ以上すてきなならくらは熊は願ったつてありやせんぞ。隠しに金がぎっしり入ってるんだ。何かする必要なんてないものな」。

ルーパートは緑色の上着を着込むと、なにはともあれ隠しに手を突っ込んだ。本当に金があるかどうか見届けようとな。なにしろやっこさん、悪魔なんぞ信用しとらんかったので。悪魔は嘘の父と呼ばれとるから。しかし隠しはまるで決して空っぽにならないフォルトウナートウスの財布さながらなことが判明したので、ルーパートは自分のものになった熊の皮を肩に引つ掛け、あばよも言わずに悪魔とおさらばした。ても、悪魔はいつの間にか姿を消していたのでな。

さてそれからというもののルーパートはただもうぶうらぶうらと日を送った。(俗に言うように)神様をおちゃらかした「太平楽に暮らした」んだけど、この場合悪魔もおちゃらかしたわけだ。堂堂たる髯をおっ生やかしたので、ドイツとかポーランドとかどこぞの国会に現れても議員さんの資格は充分。なにせ力つてものは髪の毛の中にあるでな。こりや例のサムソンの話(88)が教えとるこつた。二年目になるともうそのていたらくと来たら、やどなし(89)森の妖怪といったところ。ことにまた指の爪が中国の基準などをまだ超えておつそろしく貴族的に優雅に伸びちまったからなあ。人は遠くからやっこさんを見掛けると、というか、嗅ぎつけると、すたこらさつさと避けたもんだ。なにせ、煙草を吸いもしないのに、もう遠くの方から戴勝のように臭つたから。あ、ところでこの鳥、臭鶏(90)なんて汚名を被せられとるがそりや不当なこと。戴勝自体はまるきり臭わんのだ。ただ不潔なのとかかずらわつとるもの(91)のせいでそうした悪評が立てられとるに過ぎん。

ところで熊の皮を着た男はいつも貧乏人たちにどっさり金を施した。七年間を生き延びられるよう、祈つてく

れ、と言うてなあ。で、貧乏人たちは喜んでその金を受け取り、ちゃんと熱心にお祈りいたします、と約束した。連中が祈ったかどうかは、わしや知らんよ。それから旅籠の主人たちもこれまたご同様、喜んで迎え入れてくれた。だってやつは大金を払ったからな。そもそも確かなること盤石のごとしだが、だれかが金を持って、ぼつぱと遣い捨てるなら、たれ憚ることなく世にも厭わしい熊の皮を着た男でいられる。いついかなる時だって、ごもつともさま、けっこうですとも、かしこまりましてございます、という応対を受ける。ただしだ、それにやあ絶対に金がなくっちゃならんが。

こうして熊皮を被つての難行苦行は早くも四年目に入った。これには熊の皮を着た男もうんざりさ。なにせ自分で自分が厭でたまらん。いわんや他人様においてをやさね。顔中引きずってるのは勢い盛んな杉苔の原生林、指に生やかしてるのは堆肥搔きの熊手だもの。いくら金があつたつてさほどおもしろいことなんざない。旅籠で泊められる部屋はいつも一番裏側で、最上階の部屋。階段を三つ、四つ、五つと昇る高さで、これまたしよつちゅう廁の傍だ。ある時こんな具合で心底むしゃくしゃしながら自室に籠もつて、つくづくおのが運命を考え、綺麗さっぱり新しい人間に生まれ変わつて、指に生えとる糞忌しい爪もろとも不潔千万な髻とおさらばする時節が巡つて来ればなあ、といやもう切切と待ち望んでいると、隣の部屋でだれかがなんと哀れにも呻き喘いでいるのが聞こえた。熊の皮を着た男は、お隣さんの役に立ってやろう、とすぐにそちらへ向かった。なにしろ、この男、ねっから優しい善良な気質だったんで。坐つて嘆き悲しんでいたのは一人の爺様だったが、熊の皮を着た男がやって来たのを目にして、魔物が自分を攫いに出現したのだ、と思ひ込んだ。熊の皮を着た男は神様のお創りになった生き物というよりは悪魔の方にずうつと似てたからな。でも、そのうちやつとこ宥められ、何に苦しんでいるのか打ち明けよう説得された。この苦しみたるや、熊の皮を着た男が以前見舞われていたのと全く同じ、つまりは、どなたも

よつくご存知の貧苦つてやつだった。この爺様には娘が三人いたが、莫大な負債もあったのさ。このひとをすつてんてんにしちゃまった旅籠の主人に支払いをすることができなかつたんで、ひどく切り詰めた暮らしを強いられていたところだった。これを聞いた熊の皮を着た男はげらげら笑った。そりゃあな、だれだって隠しカケの中で黄金の泉はまが迸り出るなら、楽しくげらげら笑えるわさ。爺様の借金を一文残いちもんらず払つてやると、爺様は一緒に行つて、娘たちに会つて欲しい、と招いた。娘たちは少なからず美人でして、このお札にそのうちの一人と結婚して戴きたい、と言うてな。熊の皮を着た男にとつてこれは願つたり叶つたりだった、てのもやつこさんには時間がどっさり有り余つており、熊の皮の上に寝転がっていると時間が長過ぎることがしばしば。で、大胆不敵な兵士なら当然やつてしかるべき(女性) 征服を目指したのだが、ただ悲しいことに、小綺麗小ざつぱりと体裁を調えることは許されない。黒黒と香蠟かうろうで固めた(男) 髯や尖つた髯、小粋に縮らせた可愛い巻き毛やすらりとした両の脇腹、手入れの行き届いた爪、ケルン水オ、デ、ニコロ、それから最高級のハバナ葉巻(96)。こういったことは全て禁じられておつて、徹頭徹



尾熊皮男でおらにやあならず、そのまんまの恰好で出掛けて行って、突撃を取行、居れり、立てり、去れり、臭えり、つてしだいだった。助けてもらった男の上の二人の娘たちは、いろんな弁髪が何本もくつついている鬘を、(普通男がそうするように)後頭部でなく顔面に被っていて、(握手しましょう、と)グライフ鳥みたいなお手手を突き出したこの怪物にぞおつと震え上がった。それにこの男、もう四年も同じ下着なんで、これがすっかりイサベラ色になっており、地下の穴蔵の古い空っぽの酢の大樽のような臭いがした。これじゃあ全然食欲をそそらなくて、一番末で、一番綺麗な娘だけがその場から逃げ出さないうでじいっと我慢した。この熊の皮を着た男こそお父様の救い主で、そのお蔭で自分たちも罵り嘲りを免れることができたんだって肝に銘じていたのでな。それに恩を知るという美德を備えていた。これは随分多くの人間が持っているが。さて、熊の皮を着た男は、この美しい子がこちらのいやらしく、またぞつとする姿形にも怯めず臆さずでいる、いやそれどころか、父親がこちらにした約束を守ろうとしているのがよく分かった。そこで見事な指環——もつとも、これ、半分にしたやつだが——を婚約した証として渡し、それから、こちらがもうあと三年、できればそれ以上いくらか生きていられるよう、ほんとに熱心に祈りを捧げて欲しい、と頼み、三年間の暇乞いをした。この期間で熊の皮を着てのご難行をおしまいにし、そのあと寸分の隙もない若紳士になって戻ろうちゅうしだいだ。こういう芸当はだれにもできることじゃない。まずまず善良温順な青年として親許を離れたのに、これ以上のもはないっていう大変な熊の皮を着た男になり、森の悪魔よろしくのていたらくで帰還あそばす御仁が少なくないものなあ。さて熊の皮を着た男と婚約したら若い飛び切り美人、飛び切り美人のうら若い娘は黒い衣装「喪服」を身に纏い、もじゃもじゃの婚君を種に姉たちからなんともひどくいびられなければならんだ。この女ども、片っぽがああ言えば、もう片っぽがこう言うってな具合にからかったもの。「用心おしよ、おまえが手を差し出す時、それを食いぢぎられないようにね。だって、あちら

はおまえを食べちゃいたいくらい愛いとしがつてるからね」。——「注意するんだよ、可愛い鉛あめんぼちゃん、あちらがおまえを舐なめつくさないようにね。熊くまって蜂蜜はちみつが好きだからねえ」。——「なんでもあちらの言う通りにするんだよ。さもないと喰くるよ。おまえの未来のご亭主ていしゅのもじやもじや熊くまは」。——「いやはや、なんて陽気なご婚礼こんりになるだろ。まず始まりは熊くまさん踊おどりでございなんだから」。——でも若い花嫁いひなづめは何を言われてもしんと黙もくりこくって、好きだけ姉あねさんたちにからかわせ、冗談じゆたんを言いわせておいた。その間許いひなづめ婚者こんしやの方は暮くらしを続けていた。もっともなにもかもほどほどにだったが。こうして七年間の最後の年を無事に切り抜けると、その最終日に、七年前自分が悪魔あくまに出くわした場所を訪ね当あたてた。悪魔あくまもやはりちゃんと出現しゆげん、ただしいくらかご機嫌きげん斜かためでな。なにしろ熊くまの皮かわを着た男おとこが熊くまの皮かわの難行なんぎやうにとつくの昔むかしから飽あき飽あきしちまって、自分おれと縁ゆかりを切りたがっていることは、先刻承知さきしやくぢやうちだったんで、手際てぎわいよく仕事を済すまませて、元通り上着じやうぢきを交換こうかんしようとした。ところが熊くまの皮かわを着た男おとこはこう言った。「そうさっさとおしまいつてわけにやあいかん。まずささま、おれを舐なめて綺麗きれいに磨みがき上げるんだ。この前まへささまが請まねけ合あったようにな。そうしておりゃあ小粋せうすいな風采ふうさいになるのよ。森ヴァルドルフの妖怪やかいかきさまみたいじゃなくつてな。この穢けがらわしい魔物まぶつめが」。そこで悪魔あくまは熊くまの皮かわを着た男おとこを小ざっぱりと修復しゆふくせざるを得えなかつた。おのれの爪つめでもって髪かみの毛けを梳とかし、卸おろし金かねみたいに

がりがり引ひつ搔かく舌したでもって肌かわを綺麗きれいに舐なめ清きよめ、爪つめをさちんと切り、



体を洗い、元通り全くすてきにせにやならんかったのだ。これは辛い骨折りで重労働だった。だってな、一年目の熊の皮を着た男相手だつて本腰入れての努力が必要だつたらうに、ましてや、熊の皮を被つて七年間持ち堪えた代物だからな。それから悪魔は、元熊の皮を着た男、以後改めルーパート殿から、お別れの挨拶にしたたかな足蹴を一発頂戴つかまつった。ルーパートは美しい身なりを調べると、特別仕立ての駆通馬車えきとほりばしに乗り、大急ぎで許婚のいる町へ向かったが、ここではだれ一人身許を知る者はありやせん。で、花嫁探しをしている金持ちという触れ込みで登場、うち一人は既に自分の許婚なんだが、例の三人の美女のどれかと結婚するつもりだ、と噂を流したもんだ。許婚は男には目もくれなかつたが、その姉たちはおっそろしくこの殿方がお気に召し、孔雀くわんせうのように着飾つて、どちらが相手をものにするか、きゃんきゃんやり合つた。しかしルーパートは花嫁に、葡萄酒を一杯戴きたい、と申し出、飲み乾し、同じく乾杯を、と頼んだ。そうすると娘は酒杯の中に自分の婚約指環のもう半分があるのを見つけ、驚いたり歓喜にうっとりしたりで、すっかり気が遠くなつた。男は相手をかき抱いて、接吻をした。そこへ姉たちが着飾つて、おっそろしくめかしこんでご登場あそばしたが、妹の幸せを見せつけられて妬みと癩癩やんぱかで顔中黄色くなつたり緑色になつたりよ——そうしてばたご退場。一人は恨みつらみで一杯で釣瓶井戸つるびんいどに飛び込み、もう一人はこの世にありつただけの憎しみ怒りで一杯で首をくくつた。すると即座に悪魔が出現、二つの魂を引つ捉とらまえていわく「わしはどうしても魂を一つ手に入れにやあならなかつた。——それがほら、二つ戴きた。結婚、おめでとうよ」。そうして行つちまつた。ルーパートは喪が明けるといとも優しい飛び切り美人の末娘と婚礼を挙げ、もうもう二度と決して熊の皮を着た男にはならなんだ。

解題

ベヒシュタインはひよつとするとグリム兄弟に触発されてこの物語をDMBに入れたのかも知れない。

KHMには既に初版第二部(一八一五)に一五番(一八一九年の第二版では一部二部通しになって一〇一番)として「緑上着の悪魔」Der Teufel Grünockが載っている。これはハンス・ヤーコプ・クリストフ・フォン・グリンメルスハウゼン(一六一一?—一七六六)の『ジンプリツイスマスの冒険』(一六六八/六九。望月市恵訳『阿呆物語』)Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen: *Der abenteuerliche Simplicissimus* の登場人物や題材から新たに書き下ろされたいわゆる「ジンプリツイウス作品群」(一六七〇—一七二) *Simplicianische Schriften* に出て来る物語(一六七〇)を利用したもので、その点ベヒシュタインのこれと全く同じである。ただし、KHMの方は一八四三年にパーダーボルンでの、つまりフォン・ハクストハウゼン男爵家における採録を基にした「熊の皮を着た男」Der Bärenhäuter が一〇一番として入れ替わった。一八五六年の詳細な注付き版には奇妙なことにこのことについて何の記述もない。なお、KHM一〇〇「悪魔の煤だらけの兄弟分」Des Teufels rüßiger Bruder の主人公、悪魔に拾われて地獄で七年間下男奉公をしたあと「悪魔の煤だらけの兄弟分」と名乗るよう悪魔に命じられた男も、「熊の皮を着た男」と全く同じ解雇された兵士である。この男は地獄での釜焚きが専らの仕事だが、蓋を開けてはいけぬ、と悪魔に厳命されていたのに、その留守中蓋を開ける。が、中には傭兵時代恨みの的だった下士官、旗手(中隊の最下級でたいい最年少の士官。ただし貴族出身であるのが普通)、それから將軍閣下が入っていたので却って釜の下火を強め、お蔭で悪魔に罰せられずに済む。この部分などはこうした話がどういふ物語共同体で好んで話され、好んで聴かれたのかを示唆するものであろう。

B P の記載によりグリンメルスハウゼンの物語の粗筋を訳出しておく。

ニコポリス近郊の会戦(一三九六)から逃げ出した傭兵が七年間魔物に仕えることになる。毎夜一時間歩哨に立ち、体を清めることなく、主の祈りを唱えることなく、自分が丁度撃ち殺したばかりの熊の皮を外套として身に纏わねばならない。期限が終わる少し前魔物は彼をたくさん金を持たせてある旅籠に送り込む。ここで一人の立派な紳士が魔物の手で彼のために描かれた肖像画を大いに嘆賞するあまり、自分の三人の娘のどれかを、もし年齢を当てることができればだが、彼に妻として与えよう、と言う。熊の皮を着た男は末娘を選び、彼女に自分が嵌めている指環の半分を渡し、それから彼女を置いて立ち去る。その後魔物に体を綺麗にしてもらい、堂堂たる支度を調べ、戻って来る。激しい嫉妬に駆られた彼の花嫁の姉たちの一人は首を吊り、もう一人は入水する。

熊の皮を着た男の肖像画がシュヴァルトのホーエンローデ城にあるしだいはかくのごとし、となるわけ。

これが「熊の皮を着た男」の伝説の最初のものである。

さてベヒシュタインの話はKHMのそれと筋の点では同工異曲だが、語り口は大いに異なる。ベヒシュタイン一流の文体のサンブルと言えよう。彼はこれを郷土テューリンゲンの大先輩で私淑して止まなかつたヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス(一七三五—一八七)に学んだのである。饒舌体とでも申そうか。たとえば、「堂堂たる髯をおつ生やかしたので、ドイツとかポーランドとかごの国会に現れても議員さんの資格は充分。なにせ力つてものは髪の毛の中にあるな。こりや例のサムソンの話が教えとるこつた」とか「ことにまた指の爪が中国の基準などをまだ超えておつそろしく貴族的に優雅に伸びちまつたかなあ」とか「ただ悲しいことに、小綺麗小ざっぱりと体裁を調えることは許されない。黒黒と香蠟で固めたちよび髯や尖つた髯、小粋に縮らせた可愛い巻き毛やすらりとした両の脇腹、手入れの行き届いた爪、ケルン香水、それから最高級のハバナ葉巻。こういったことは全て禁じられておつて」などなど。またびりつとした諷刺の葉味が利いていることも。たとえば「で、貧乏人たちは喜んでその金を受け取り、ちゃんと熱心にお祈りいたします、と約束した。連中が祈つたかどうかは、わしゃ知らんよ」とか「そもそも確かなること盤石のごとしだが、だれかが金を持って、ぱっぱと遣い捨てるなら、たれ憚ることなく世にも厭わしい熊の皮を着た男でいられる。いづいかなる時だつて、ごもつともさま、けっこうですとも、かしこまりましてございます、という応対を受ける。ただし、それによあ絶対に金がなくつちやならんが」である。民衆によく用いられた慣用句が顔を出すのもベヒシュタインの遣り方。そしてここでもまたふざけるのである。たとえば「神様をおちやらかした」「太平楽に暮らした」んだけど、この場合悪魔もおちやらかしたわけだ」。

A T三六一 「熊皮」 Bear-skin.

原題 Rupert, der Bärenhäuter.

訳注

(1) ヴァルター・シエルフ Walter Schert. 一九二〇年マインツ(現ラインラント＝プファルツ州)に生まれる。児童文学・昔話研究者。

(2) ハンス＝イェルク・ウター Hans-Jörg Uther. 一九四四年北西ドイツのヘルツベルク・アム・ハルツ(現ニーダーザクセン州)に生まれる。文芸学者・口承文芸研究者。ゲッティンゲンの『昔話百科事典』*Enzyklopädie des Märchens* 編集スタッフ上

級メンバー。ATU編纂者。MdW前編集者。KHM(一九九六、二〇〇四)、『ハウフ昔話集』(一九九九)、DMB(一八五七版)・NDMB(一九九八)などの校訂編纂(いずれもMdWシリーズの一卷)を出版。その他業績は夥しい。

六五 黄金きんの小さな星をつけた男の子たち

- (3) 糸紡ぎ部屋 Spinnstube. ドイツ語圏におけるこの言葉はほとんどの場合、伝説・魔法昔話・笑い話・艶笑譚・世間噺などを語り語られたり、唄を歌ったり、楽器を奏でたり、さまざまな遊戯をしたり、ダンスに興じたりしながら、既婚未婚、老若の女性が入り混じって糸紡ぎをする、そうした村落共同体の場を想起させる。若い男性たちは——もとより彼らは糸紡ぎをするわけではないが——娘たちの気を惹こうとここに参加するわけである。暮れやすく明けにくい長い冬の暗さと寒さのため、青年たちと娘たちは必然的に村落内のどこか明るく暖かい大きな部屋に夜毎集い、仕事と娯楽がそこで結びつく。こうしたことはドイツ語圏ばかりの習慣ではなかった。十八〜十九世紀になるとドイツ語圏では風俗に対する行政の野暮な介入が再三あって、糸紡ぎ部屋に集まることを禁じる試みがなされたが、糸紡ぎ部屋は家屋から独立していたわけではなく、家屋には娘らの両親や祖父母、兄弟姉妹や使用人たちがいたし、隣人たちとの行き来もあったので、妙齢の女性が意中の男性と二人きりで懇ろになる機会はまあ無かったであろう。官憲の口出しは要らぬお世話であったので、ただし、ただしですよ、目は口ほどに物を申しますな。糸紡ぎ部屋でこっそり気脈を通じ、あとは牧場や家畜小屋などで情を交わし、拳句の果ては娘のお腹が大きくなる、ということとはもとより珍しくはなかっただろうが。さて、こうした共同体の団壊が崩壊した原因は、外部からの干渉などではなく、ひとえに十九世紀後期以降の繊維産業の急速な発達である。

- (4) 伯爵は遠国に出かけねばならなくなり *der Graf in ferne Lande ziehen mußte*. あとに出る「ポルトガル」がこの「遠国」か。

- (5) しのの木 *Lindenbaum*. しのの木科の落葉喬木。ただし「リンデンバウム」は中国原産のしの木(これは樹高一〇メートルほど)とは同属別種。またかつては「菩提樹」とも訳されたが、その場合は「洋種菩提樹」とするべきである。「リンデンバウム」には樹高三〇メートルに達するものもある。またその樹齢も長く、全く健やかに四〇〇〜五〇〇年も繁茂する。稀にだが千年以上にもなる。

- (6) 亜麻仁 *Leinknoten*. *Leinknoten*. 亜麻の種子。これから搾った油が亜麻仁油あまねあぶら(塗料、灌腸薬などに用いる)。ただ、これが妻にとつて何の役に立ったのか、その後一向話に出て来ない。

- (7) ポルトガル *Portugal*. ドイツ語圏から見れば「遠国」になろう。

- (8) 女魔法使い Zauberin. 「女魔法使い」はドイツ語圏のメルヒェンにあまり出て来ない。KHMでもKHM二「ラプンツェル」Rapunzel と KHM六九「エリン・テューリンゲル」Jorinde und Joringel、KHM一三四「六人の従者」Sechs Diener、KHM一九七「水晶の珠」Die Kristalkugelに登場するのみ。しかも後の二話ではたいした役回りではない。
- (9) 妖精 Fee. フランス語「フェ」feeから。ドイツ語圏では全く馴染まない登場形態。これだけでもこの物語がフランス語圏から輸入された証拠になろう。フランス語圏の民話・伝説では大いに活躍する超自然的存在。女性である。優しく愛らしい年若なフェから意地悪で醜い年取ったフェまでさまざま。ただし、後者といえども決して邪悪ではない。十七世紀から十八世紀に掛けて、これを狂言回しとする創作メルヒェン、すなわち「妖精物語」Conte de feeが大流行した。
- (10) 小さな黄金の足踏み糸繰り車 das goldne Spinnrädchen.
- (11) 小さな黄金の手回し糸繰り車 das goldne Weilein.
- (12) ご主人様は結婚なさっておられる ihr Herr sei verheiratet. おそらく伯爵の邪な母親は、嫁が猫どもを産んだ、との便りをポルトガルにいる息子に書き送ったのである。そこで、伯爵は、妻が結婚する前に言ったことが成就しなければ城から追い出してしまおう、とのかねての約束をこの遠い土地にしながら心で実行、この妻とは別れたのだから、自分には再婚の権利がある、と考えたものだろう。
- (13) まっこと、わしの一番の愛犬がわしを迎えに走り寄ってまいっても、喜んで褒美にそなたに遣わそう wahrlich und wenn mein bester Hund mir entgegenief. so wollt ich ihn doch gern zum Lohne geben. これはいわゆる「イエフタの誓い」である。旧約聖書士師記一一―十四章に出るイスラエルの士師イエフタが神ヤハヴェに、アンモン人との戦に勝利することができれば、帰宅した時家の戸口から自分を迎えに出て来るものを燔祭の生贄として捧げる、と誓ったことに因む。ところがそれはイエフタのたった一人の愛娘だったのである(一章三〇―三九節)。従って、「大したものとは考えず、あることの対価として与えることを誓ったのに、それは思いも掛けぬ大切な存在だった」という誓い、との意味となる。KHM三一「手なし娘」Das Mädchen ohne Händeの導入部はこれ。
- (14) 小さな森おっかあ Waldmütterchen. あどづは Waldmutterとして出る。未詳。「森女」Waldfrauであれば、一般には森林や原野に出没する荒荒しい超自然的な女性。ただし、VdDの「屈背のウルリヒ」Ulrich mit dem Büchel(鈴木満訳『沈黙の恋』ドイツ人の民話)、国書刊行会、平成一九年、所収)には、何か善い事をするために百年に一度姿を現し、それが済むとまた消

六七 白い狼

- えてしまふ、人間に優しい「森女」に言及されている。
- (15) 火のわきに小さな深鍋を据えていた das hatte ein Topfchen am Feuer. 後に出る月と王女が語らっている情景の挿絵でルトヴィヒ・リヒターはこのように描いているので、ここでもそう訳した。深鍋を火の上に掛けておいておかないのである。また、火は暖炉の中で燃えているのではなく、完全に開放型である耐火の床の上。通常の床より一段高い、この囲いの無い床炉は熱効率からしても大層もったいない暖房および調理法である。古代ゲルマン人やアングロ・サクソン人の時代は小屋、あるいは大きな家の場合はその広間の中央にあり、時代が下ると中央から壁際に移され、火の後ろ側の壁は煉瓦や石、もしくは鑄鉄製の背壁で保護され、背壁からの反射熱が室内に放出されるようになった。これが暖炉である。凹型の中の火の上、左右側面、前面で調理が行われた。この調理方式は閉じた台所レンジ密閉型の普及までヨーロッパでは一般的だった。転換期は十九世紀と考えてよからうか。
- (16) 鶏汁 ein Hühnersüppchen. 後ではHühnersuppe。現代ドイツのあるレシピでは次の通り。若鶏の腿一キロ。玉葱二個。スープ・キューブ三個。丁子大匙三。粒黒胡椒大匙一。乾燥パセリ大匙三。水二リッター。腿は洗い、玉葱は一個を四つに切り分け、丁子を挿し込む。材料を一時間半煮る。煮えたら腿を煮汁から出し、骨から肉を外す。煮汁を濾し、これに肉を戻す。もつとも、スープ・キューブなど余計だ、という意見(この場合はあとで塩で適宜味付け)もある。また、訳者ならきつい丁子ではなく、ローズマリーのような香草を用いる。米やヴァーミセリ(イタリア語「ヴェルミチェリ」Vermicelli。極細のパスタ)などをあとから加えてもよいだろう。なお、煮えた腿を一旦煮汁から出して、骨から肉を外して、濾した煮汁に戻す、といった洗練された調理法はもちろんこの素朴な物語では採用されておらず、鶏肉も腿だけでなく手羽(手羽先は食べにくいがまことに美味しい)、良い出汁が出る)やその他の部分も使われていよう。だから、食べていると小骨もたくさんあったわけ。
- (17) 飯食う前には踊りにやならぬ Vor Essen wird kein Tanz. 食事の前にダンスは始まらない。
- (18) 月の中の男 der Mann im Mond. ドイツ語圏では、月面の染みが薪を背負った男に見える、とも言う。DMB三二「月の中の男の昔話」Das Märchen vom Mann im Monde 参照。
- (19) なにしろたこえはわたしなんぞは体全部がそっくり混じりけのない硝子の山山からできているのだから denn ich zum Beispiel bestehe ganz und gar aus lauter gläsernen Bergen. どうも文脈が理解できません。どなたか「高教を」。
- (20) 竖琴 Harfe. 極めて古い弦楽器。手あるいは義甲で弦を弹奏する楽器中最大。

六八 儉約家あにいと浪費家あにい

- (21) 旅修行 Wanderschaft. 何であれ技術を必要とする業種に従事するためには、幼少年時代にその業種の親方と年期奉公の契約を結んで徒弟になり、一通りの技術を習得した、と親方が認め、職人資格課題作品 Gesellenstück を提出して合格すると、職人として旅修行をすることを許される。旅修行の職人は各地の親方の許に住み込んで伎倆を磨き、伎倆に十分自信が付き、かつ開業資金も溜まると、所属する組合(ギルド、ツunft、イヌング)に名乗り出て、親方資格課題作品 Meisterstück を提出し、親方昇格試験を受ける。
- (22) 喫き煙草 Schnupftabak. アメリカの先住民によって行われていた煙草の煙を吸うという習俗は、一五五〇年頃イスパニアに、一五八三年フランシス・ドレイクの手の者によって英国に持ち込まれ、英国ではパイプを用いての喫煙が宮廷人の間に拡がり、まもなくロンドン市中に公共の喫煙ハウスが幾つもできた。その後為政者による喫煙禁止令がさまざまな国で、また、しばしば布告されたが、一六〇〇年直後にはたいの海運国で喫煙が蔓延、インド、やがて中国、日本にまで及んだ。ドイツにおいても三十年戦争(一六一八―四八)によってこの習慣が広められた。煙草の煙を吸う他、十八世紀のヨーロッパでは、特に上流階級に、香料を混ぜた煙草の粉をつまんで手の甲に載せ鼻から吸う喫き煙草の習慣(吸い込んではいくしゃみをし、ハンカチーフで鼻を拭うのである。くしゃみが健康に良い、との民間信仰もこの背景にあつたかも)がかなりもてはやされるようになった(洗練された美術工芸品の喫き煙草入れが今日まで多く残っている)。下層階級、とりわけ水夫・水兵の間ではヨーロッパ人の発明である噛み煙草(板状に固めた煙草の葉をナイフで適当な大きさに切り取って口に入れ、噛むのである。これなら裸火を極めて嫌う木造帆船でも安全この上なかった)が広まった。十九世紀になると喫き煙草は最下層の人びとの間に残るだけになり、一八五〇年以降パイプ煙草は葉巻に次第に押され、一九〇〇年頃以降は紙巻き煙草が一般的になった。紙巻き煙草を女性が吸うことは、第一次世界大戦中および大戦以降社会的に許容されるようになった。
- (23) 火酒 Schnaps. ブラントヴァイン Brantwein とも。葡萄・林檎・桜桃・桃・梅・杏・梨などの果実、苺・木苺・草苺類、穀類、玉蜀黍、じゃがいもなどを原料とする蒸留酒。もつとも、穀類、じゃがいもからの蒸留酒は正確には Korn といふ。
- (24) 儉約家にあに浪費家がつきもの Sparer muß einen Vertuer haben. 儉約家には浪費家がいなくてはならない。
- (25) 備えあれば憂い無し Spare in der Zeit, so hast du in der Not. であるうちに儉約を。そうすりや困った時に蓄えがある。
- (26) 蓄財に励め、若者、年老くて窮迫するは哀しきものや Junges Blut, spar dein Gut! Darben im Alter wehe tut.
- (27) グロッツェン銀貨 Silbergroschen. 十三世紀にフランスのトゥールで鑄造されたグロ・トゥールノア gros tournois (ラテン

語 *grossus thronensis*。「トゥールの分厚いの」を真似てドイツ語圏でグロッツシエンの名の下に作られたやはり分厚い銀貨。片面だけ刻印された極めて薄いプフェニヒ銀貨一二枚に相当した。もつともその後間もなく価値は減少し続けた。大きさ、刻印、銀含有量、鑄造所によりさまざまな名称がある。たとえば、「エンゲルグロッツシエン」*Engelgroschen*、「シユピッツグロッツシエン」*Spitzgroschen*、「マリーエングロッツシエン」*Mariengroschen* など。

(28) ゼクサー銀貨 *Sechser*。かつて北ドイツで流通した半グロッツシエン銀貨、あるいはオーストリアの六クロイツァー銀貨。六プフェニヒ、あるいは六クロイツァーに相当するのでこの名がある（ゼクス *sechs* Ⅱ六）。

(29) 火打ち道具で火を打ち出した *schlug ... Feuer*。火打金（鋼鉄片）と火打石（石英の一種。燧石）を打ち合わせ、火花を飛ばせたのである。この火花が燃え易い物質（火口）に移ったところで息を吹きかけ、燃え上がらせて炎を得る。

(30) 火口 *Schwamm*。ドイツ語「シユヴァム」は普通「海綿」を指すが、ここでは *Feuerschwamm*、*Zunderschwamm* のこと。学名 *Fomes mentharicus*。Fomes *fomentarius*。「フオメス」は「火口」、「フオメンタリウス」は「火口を作るもの」の意。和名「釣鐘茸」。樵や樺の老木や枯れ木に生える。多年に亘って成長、巨大になることもある。この茸本体を煮沸し、叩いてからほぐし、濃い硝石の水溶液に浸し、乾燥させたものを点火器で打ち出した火を移す火口として用いた。麻布を焦がしたものに硝石を混ぜてもつた。日本においては釣鐘茸ではなく、白海綿茸を火口としたようだ。白海綿茸はかつて美濃では「ヒゴケ」、信濃では「ホクチャケ」と称された。白色で柔らかく、火を点けると消えにくい。この他日本では茅萱の成熟した白い花穂のような燃え易い物質を焼酎や硝石とともに煮て火口とした。

(31) 同じこと、あんととーとほほほ。同じこと、あんととーとほほほ。So viel wie *Duhuhuhu*! So viel wie *Duhuhuhu*! 「あんと」がそのまま「ドゥフフフフフ」と泣き声になっている。

六九 菊戴 きくたい

(32) 菊戴 *Goldhähnchen*。学名 *Regulus*。雀目鶯亜科菊戴科。体長九・五センチ、体重三・五グラム。小型の鳥。ヨーロッパ全土と北アジアに棲息。この地域では最小の鳥（因みに世界で最小の鳥は蜂鳥の類である）。真っ直ぐで尖った嘴、長い脚、短く幅広い翼を持つ。頭頂部に鮮やかな黄色の冠毛があるので和名を「菊戴」と言う。ドイツ語名「ゴルトヘーンヒェン」は「小さな黄金の雄鶏」の意。学名のラテン語「*regulus*」は「小王」「王子」「王家の一員」の意。

(33) 鶴鶴 *Zaunkönig*。雀目鶴鶴科。体長一〇センチ、翼開長一六センチ、体重七・一三グラム。菊戴とともに最小の鳥類。全身

は茶褐色で、上面と翼に黒みがかった横縞がある。ヨーロッパ全土、北西アフリカ、小アジア、中央アジア、ロシア極東部、中国東北部、朝鮮半島、日本に掛けての広範な地域と、北アメリカ東部・西部に棲息。ドイツでは季節移動をしない鳥(留鳥)で樹上ないし地表、あるいは樹木・地面・壁などの穴に丸い巣を作る。このように穴に営巣することが多いので、学名をトログロデユテス・トログロデユテス [Trogodytes Trogodytes] (「トログロデユテス」は「岩の割れ目に棲むもの」の意、と名をいう。体が小さい割には啼き声が大きく、春の到来とともに、極めてよく響く美しい高音で華麗な節回し。「チイチイ」「ピルルル」「チルルル」などの組み合わせとか。秋から冬に掛けての地啼きは「チャツチャツ」。ドイツ語「ツアウンケーニヒ」は「垣根の王様」の意。KHM一七一「垣根の王様 Zankönig」によれば、「ケーニク・ビュン・イック、ケーニク・ビュン・イック」 King bin ik - König bin ik - 「ケーニク・ビュン・イック」 König bin ich の方言)、つまり「王様はおらあだ、王様はおらあだ」と叫ぶのだそうだ。

(34) 豌豆 eine Erbsen. 我ら日本人が日常食べる豌豆は、その未成熟な豆である美味なグリーン・ピース、あるいはもっと若くて鞘を食べるサヤエンドウ。しかし、ここでのいうのは成熟した豆を皮ごと、あるいは皮を取り除いて、乾燥させたもの。ドイツ語圏や英国などでは食材としてありふれた豆。

(35) プフェニヒ銅貨 Pfennig. DM B五〇「のらくら昔話」訳注「プフェニヒ銅貨」を参照。

(36) ターラー銀貨 Taler. 一五一九年以降ヨアヒムスタール(ヨアヒム谷)で鑄造されたのでこの名で呼ばれるようになった大型銀貨。それ以前はギェルデンクロッシエン。当時は一枚がグルデン(＝ギェルデン)金貨(もともとグルデンは後に銀貨になった)一枚に相当したからである。十六世紀の最初の三分の一以降ドイツのほとんどに到る所で誕生、間もなく近隣諸国でも模倣されるようになった、重量が一オンスないし二ロート(約二七・三〇グラム)の銀貨全てがやがてこう呼ばれるようになった。一ターラー＝二四クロッシエン＝二八八プフェニヒの換算。ずっと下って一八四〇年のザクセン王国では一ターラー＝三〇〇プフェニヒ。DM B六三「三つの贈り物」訳注「ターラー銀貨」をも参照のこと。

(37) 吊り下げられた王冠を——槍で突き当て、これを落とす方——その方と玉座を分かち合いましょう sie werde demjenigen ihre Hand reichen und den Thron mit ihm teilen, der mit verbundenen Augen die aufgehängte Krone mit einer Lanze herabstechen werde. 王妃の念頭にあった配偶者候補は騎士、すなわち貴族だったので、こういう条件を出したわけ。つまり、騎乗して疾走しながら小さな槍で突き当てることができるのは、少年時代からそうした戦闘訓練に従事し、馬上槍試合で活躍する騎士階級の男性に決まっていますはずだったからである。

(38) 粉挽きは丁度驢馬追いが入り用だった dieser brauchte just einen Eselreider. 粉挽き、すなわち製粉業者は客から預かった

穀物を粉挽き小屋まで運搬し、できた粉を客の家までまた運搬するのに、荷役用の動物が欠かせない。温和しくて粗食に耐え、小型な割には力のある驢馬は古代ギリシア・ローマの時代からこの用途に使われた。

- (39) 驢馬 *Equus* 奇蹄目馬科馬属驢馬亜科。馬科の中では最小。耳が長い。野生のものはアフリカとアジアの草原地帯に棲息。ただし稀少。アフリカ野驢馬はソマリア野驢馬とスビア野驢馬に分かれる。後者は家畜の驢馬の祖先である。約五〇〇〇年以前古代エジプト人が家畜化した。さて、ドイツのある百科事典 (Meyers Lexikon, 1926) はこう記している。驢馬はドイツのよくな中部ヨーロッパの気候にはあまり合わない。そこでこの地域の驢馬は肉体的にも精神的にも南ヨーロッパのものに較べると劣悪になっている。南ヨーロッパの驢馬はより美しく、上品で、ドイツの同族のように強情、鈍感といった性格のかけらもない、と。この記述の当否はともあれ、ヨーロッパにおいては(南のギリシアを含めて)、この粗食に耐える働きの動物は、反抗的でむら気で愚か、と決めつけられたのが相場である。これが正しかったとしても、それは劣悪な環境で酷使されるのが普通だった時代には、驢馬としては当然の反応だったのであるまいか。飼い主が優しくきちんと世話をしてやれば、その愛情に応え、また記憶力も強く、繊細だ、との説もある。フランスの作家エクトル・マロの家庭小説『家族の中で』(二八九〇) Hector Malot: *En famille* (日本では『家なき娘』、最近では『ベリース物語』の題で知られている) に登場する驢馬のバリーカール(ギリシア産)が自分を可愛がってくれた主人の少女ベリースを愛し、記憶し、気遣うところから観ると、なるほどそうなのかも。

ただしなんとしても弁護できないのは、その啼き声である。調子外れで耳障りで、イヤアアア、イヤアアアという風に響く絶叫はまことに不快。

- (40) さて、昔まだ人間だった時この哀れな驢馬には妹が一人いた Nun hatte dieser arme Esel, als er weiland noch ein Mensch gewesen war, eine Schwester gehabt. 妹のほかにまだ何人か年下の兄弟姉妹がいたはずだが、これらには一向言及されない。
- (41) 修道院 Kloster. 女性が雇い入れられたのだから、これはもちろん女子修道院(尼寺) Nonnenkloster である。
- (42) 門番の役 das Amt der Pfortnein. おそらく読み書きができないこの修道尼としては、こつとした役職を委ねられたのは、出世と言つてよろしかろう。
- (43) 自身修道院の菜園で最も上質で最も効能のあるものを栽培していた …… baute die besten und kräftigsten in dem Kloster-garten selbst. 修道院は自給自足が建前だったし、自院の修道士・修道尼が病気になった場合はもちろんのこと、外来の宿泊者、修道院に頼つて来る貧民、流浪の物乞い、ハンセン病患者などに施薬するため、催眠・鎮痛剤である阿片の原料の罌粟や、鎮咳、解熱、利尿、便秘、下痢、外傷、皮膚病などに効く薬草類を院内の菜園で栽培していた。

七一 三人のどんな悪魔

- (44) いちやいちゃ月 *Kühmond*. 直訳 || 接吻月。蜜月、ハネムーン *Fitterwochen*. *Honigmonat*. *Honigmond* のこと。結婚後しばらくの甘い数週間。人によつては数箇月(はて、そんなに続くかな)。
- (45) とんなな悪魔 *dummer Teufel*. 「莫迦やろう」という普通の罵言でもある。この物語ではこの他にも *Teufel* の入った慣用語、成語が幾つか出て来る。
- (46) やっこさん、うちでこういう具合になつちまつた *Das kam ihm heim*. 「家庭内で彼はそういうこと(|| 何一つ持てず、何一つできないという状態) になつた」と解釈した。自信がない。どなたか || 高教を。
- (47) 日曜日、「教会で回される」鈴付きの献金袋にはヘラー銅貨の代わりに鉛を放り込んだもんさ *tat sonntags einen Knopf in den Kinglebeutel statt des Hellers*. 教会での礼拝が済むと、席に坐つてゐる会衆の間に鈴付きの献金袋が回される。これに硬貨を投げ込むと鈴が鳴り、確かにながしかの寄付をした(あるいは、しなかつた) ことが周囲に判る仕掛けになつてゐる。もつとも、小石やボタンでも鈴は鳴る。
- (48) じゃがいもを拾ひ集めて来なければならんだ *muß Kartoffeln stopfeln*. *stopfeln* || (*zusammen*) *stopfeln*, *von Hand auflesen*. 収穫が終わつたひとさまの畑へ行つて、落ちてゐる、あるいは掘り残された屑じゃがいもをせつせと集めるのである。
- (49) 袋に入った猫を買つちやあいいけない *man die Katz nicht im Sack kaufen*. 吟味をしないで買ひ物をする。
- (50) 女は手札をよくく心得ていた *Die kannte schon den Rummel*. 「ルンメル」*Rummel* とはカード遊びの一つピケットで、プレーヤーの手に最も多くある色の札のこと。「ルンメルを知つてゐる」とは「万事万端心得てゐる」「抜け目がない」という意味。
- (51) 殿方ならどなたでもいらつしやいませ *da war offner Laden für jedermann*. 直訳 || どんな男にも店を開いた。
- (52) 草木の実 *Beeren*. 漿果の類。ヨーロッパの森には食用になるさまざまの野生の漿果が実る。ドイツ語圏では、ヒンベールン *Himbeeren* (ラズベリー)、ヨハンニスベールン *Johannisbeeren* (スグリ)、クランベールン *Kranbeeren* (苺桃)、ブロンベールン *Brombeeren* (木苺)、そしてエルトベールン *Erdbeeren* (苺) などなど。これらはそのまま生食するか、ジャム、砂糖漬け、果実酒、猟鳥獣肉のソースの材料とされる。
- (53) 炭焼き *Köhler*. 竈で木材を乾溜して木炭を作る業者。副産物のタールも防腐剤・防水剤として商品になつた。石炭が一般に使用されるようになるまで、都市は木材の燃料を必要としていたが、林業で生活してゐる人びとは、重い薪より、遙かに軽い木炭に加工して、これを運ぶ方を選んだ。ちなみに、深い森の中で生活し得た業種はこの炭焼きの他には狩人、それに、さよ

う、これは職業と言えないかも知れないが、追い剥ぎ・強盗の類くらいかな。

(54) 根性悪の女房は手酷い罰だて、／あら哀し、そんなの背負い込むやつは Ein böses Weib, eine herbe Buß / Und weh dem, der ein haben muß. 直訳すれば、「悪い女房、ひどい罰。そんなのを持たねばならない者は悲しむ」。

(55) わしはこのうちの一人の体に潜り込むつもりじゃ da will ich in die eine fahren. 物狂い(乱心狂気)は悪霊・魔物が体内に入ったために起こる、というのとはかつて一般の俗信。たとえば、新約聖書マタイ伝八章二八―三四節(マルコ伝五章一―二〇節、ルカ伝八章二六―三九節)に、イエスがガダラの地で悪霊に取り憑かれた二人の者から悪霊を追い出し、豚の群の中に入らせ、そのため豚の群が全て湖になだれ込んで、溺れ死にする、という話がある。

(56) 結婚場所を移らせたがっている ihren Ehrenstuhl verrücken möchten. 『グリムドイツ語辞典』には Ehrenstuhl なる語は収録されていない。Witwenstuhl verrücken, Witwensitz verrücken (寡婦の居場所を移る)は「再婚する」の意。これは V d D の「メレクザーラ」に使われている。鈴木満訳『メレクザーラ』(国書刊行会、平成一九)訳注一八二「寡婦の居場所を移ってもいい」「再婚してもよい」をも参照のこと。

(57) 悪魔の年取った祖母様 seine alte Großmutter. D M B 六「悪魔がおつ放された」[さあ、ことだ]、あるいは、悪魔が火酒を發明した話「訳注「あんたの祖母様に掛けて」参照。どういうわけか、ドイツの昔話の世界ではこうした存在が悪魔と一緒に地獄に住んでいることになっています。

(58) あくまでおらん den Teufel Teufel の入ったこの言い回しは「全然……でない」の意。

七二 恩を忘れない動物たち

(59) 巡礼 Püger, Waller なる語もあとで用いられている。中世ヨーロッパで誓いを立て、キリスト教の聖地エルサレムまで旅杖一本を携えただけで徒歩で詣で、オリエントの地から帰還した者は、帽子や衣服に帆立貝の貝殻を飾った。この挿絵でも帽子にそれが付けられているのが見える。

(60) 狼狽の穴 Wolfsgrube. 狼を落として捕らえるための深い陥穽。

(61) 黄金細工師 Goldschmied. 中世ヨーロッパにおいては金融業に従事したこともあって昔話の世界では悪い役回り。

(62) 蝮 Schlange. 「シユランゲ」Schlange は「蛇」という意に過ぎない。しかし、次に続く Ringelnatter はこれまた蛇の一種である。そして、この「シユランゲ」は物語の結び近くで王子の足を咬んで腫れ上がらせる毒蛇である。「蝮」は日本各地に棲息する毒蛇だが、鎖蛇科蝮属はヨーロッパにも分布しているので、一応この名を当てた。ドイツ語圏のたいていの地方では民衆

は蛇の種類を区別することがない。「脚無し蜥蜴」Blindschleicheや「鰻」Aalびなえも「シユランゲ」と呼ぶことがある。ただし北ドイツにおいては蝮属を「アダー」Adderとか「クロイツシユランゲ」Kreuzschlangeとか「クロイツオター」Kreuzotterとか呼んで、無毒な蛇と区別する。もっとも、この話の素材を提供した教訓寓話集『パンチャタントラ』は古代インドで編まれたもの。毒蛇の少なくない同地ではいかなる種類の蛇を指すのか、同定は不可能である。

(63) 山棟蛇 Ringelnatter. 学名トウルビノトウス・ナトゥリクス「Tropidonotus natrix」。背中はオリヅ色で暗色の斑点が多い。一・六メートルほどにまでなる。水辺に棲み、蛙、イモリ、蜥蜴、魚などを捕食する。ドイツ語圏の俗信では幸運を齎してくれる家蛇とされた(特にバルト海沿岸地域で)。寝床に連れ込むこともあり、ミルクとパンを与えることもあった。(もっとも、こうした俗信・習俗は他の蛇でも)。近年まで無毒で温和で、安息を乱された時のみ攻撃する、と説明されて来た。この物語の時代にはそれが社会通念だった。実際おとなしいことはおとなしいとか。しかし、毒牙を持ち、深く咬まれると腫れ上がり、血が止まらないこともあり、死亡例も報告されている。

(64) テリアカ Teriak. ギリシア語の「テリアケ」、ラテン語の「テリアカ」から。「テリオン」は「小さい有毒動物」の意。古代ローマ、中世イスラム社会、中世ヨーロッパで毒蛇などの有毒小動物に咬まれた際の万能薬とされた。最多で七〇種類にも及ぶ薬種を蜂蜜で練り合わせた練り薬の形態。ドイツ語圏では近代まで民間治療薬として用いられることもあった。

七三 四人の利口な旅の仲間

(65) 信実の希望を籠めて神様にお願いする者は見捨てられることとはなり Wer an Gott hangt mit getreuer Hoffnung, der wird nicht verlassen.

(66) 用心と分別が組めは全てを乗り越える Vorsichtigkeit mit Vernunft gepaart geht über alles. 商人らしい座右の銘。
力強く姿形の美しい若さは更に価値がある Eine kräftige wohlgestaltete Jugend ist noch mehr wert. この貴族は事実力強く、
姿形が美しく、若いのである。しかしルートヴィヒ・リヒターの挿絵では青年には見えない。

(68) 実行のともなう心配りが最善ぞ Sorgsamkeit mit Übung sei das Beste. いかにも旅修行の職人らしい標語である。

(69) 旅修行の職人 Wandergeselle. DMB六八「儉約家あにいと浪費家あにいと」訳注「旅修行」参照。

(70) プフェニヒ銀貨 Silberpfennig. ヨーロッパ中世初頭に鑄造された銀貨。だんだんに銅の混入量が増加し、中世後期には銀貨とは名ばかりになり、その価値も甚だ低下、やがて銅貨となった。DMB五〇「のらくらら国の昔話」訳注「プフェニヒ銅貨」をも参照。しかし素材を提供した地は古代インドなので難しく考えることはあるまい。

(71) プフェニヒ金貨 Goldpfennig. 歴史的には存在しない。しかし素材を提供した地は古代インドなので難しく考えることはあるまい。

(72) グルデン金貨 Gulden. ただ「グルデン」とあるので「グルデン銀貨」とも訳し得る。しかし木造船でも商船一隻分の積み荷全ととなれば金貨が相当であろう。グルデン金貨についてはDMB五三「白鳥、貼り付け」訳注「グルデン金貨」を参照。しかし素材を提供した地は古代インドなので難しく考えることはあるまい。

(73) 雉鳩 Turteltaube. 男女の情愛の象徴。ここでの二羽の鳩は番いなのである（ドイツ語ではTurteltaubenPaarと記されている）。ただし、ドイツ語「タウベ」Taubeは女性名詞なので双方とも女性形で通されているが、鳩たちは極めて仲の良い夫婦であり、王子に放鳥された時の嬉しさ、感謝は計り知れなかつたわけ。

(74) のろ鹿 Reh. DMB一四「黄金の牡ののろ鹿」訳注「牡ののろ鹿」参照。

七四 熊の皮を着た男ルーバート

(75) そういうしだいで兵隊稼業に入り ging dieserhalb unter die Soldaten. 傭兵ウツクネヒトになったのである。武器装具は自前で、命と引き替えに給料を稼ぎ、部隊が分捕った物を手柄に応じて分与され、許可があれば——上官がいなければ許可がなくとも——略奪をする、志願市民軍でも強制徴募兵でもないこうした連中は古代から存在したが、とりわけドイツ語圏を大いに荒廃させた三十年戦争（一六一八—一四八）では旧教徒軍（神聖ローマ帝国皇帝軍）にもスウェーデン軍など新教徒の諸軍にも所属、敵軍の捕虜になると、そちらの部隊の兵員に組み込まれるということもあった。その生懸はハンス・ヤーコプ・クリストフエル・フォン・グリネルスハウゼン（一六二二—一七〇七）の『ジンプリッティスムスの冒険』（一六六八／六九）Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen: *Der abenteuerliche Simplicissimus Teutsch* に活写カクシヤクされている。なお、グリネルスハウゼンはヘッセンのゲルンハウゼンで生まれ、育っているが、その先祖はベヒシュタインと同郷のテューリンゲンでヴェラ川河畔のグリネルスハウゼン村の没落貴族だった。彼のこの名高かつ途方もなくおもしろいパロック小説、および、その登場人物や題材から新たに書き下ろされたいわゆる「ジンプリッティウス作品群」（一六七〇—七二）Simplicianische Schriften は、読書好きなベヒシュタインのこと、当然読んでいたことであろう。

(76) 鍔広帽 Schlapput. ここでは十七世紀西欧で流行した柔らかく鍔の広い男性用の毛織りの帽子。現代ではこの手の大きな帽子は女性用。

(77) なにをこりやまたしやらくせえ Sappernudljo. 「ザッバーヌンディッチェ」。問投詞。大層訛った罵り言葉。フランス語の

- やはり罰当たりな罵言「サクレ・ノム・ド・デユウ」sacré nom de Dieu (神の聖なる御名へに掛けて) からか。なにしろルーパートは傭兵上がりなので口汚いこと人後に落ちないのである。
- (76) 嗅ぎ煙草 Schnupftabak. DMB六八「儉約家あにいと浪費家あにい」訳注「嗅ぎ煙草」を参照。「さなま、くしゃみがしたいのか」と熊をからかっているわけ。
- (79) 自分が何者にかかずらわったのか mit wem er's zu tun. この男は悪魔だったのである。赤い雄鶏の羽根飾り、緑色の狩獵服、そしてなにより片足が馬の脚であることは民間信仰における悪魔の属性。
- (80) あの世での幸せ die Seligkeit. 淨福、至福。天国での安息。
- (81) 主の祈り 主禱文。本来はラテン語「パートル・ノステル」Pater noster (我らの父よ) で始まる。ここではドイツ語「天にまじりて我らの父よ」Vater unser in dem Himmel で始まる祈り。
- (82) 試すは学ぶに勝る. Probiert geht über studiert. 試してみたのは(大学で)学問を修めたのの上を越す。
- (83) のらくら熊 Faulpelz. 「ファウルペルツ」Faulpelzは「のらくら者」「怠け者」の意。ただし「ペルツ」だけだと「毛皮」の意。悪魔は掛詞を楽しんでゐるわけ。
- (84) フォルトトゥナートウスの財布 Fortunatussäckel. ドイツの民衆本 Volksbücher の一つ『フォルトトゥナートウスと息子たち』*Fortunatus und seine Söhne*ともなっている(十六世紀初頭の出版)散文物語「フォルトトゥナートウス」(十五・六世紀のヨローッパで流布)に出てくる呪具で、無尽蔵に金が湧き出る財布。
- (85) あはよ Adieu. フランス語。長期間あるいは二度と会わない相手に用いる別れの挨拶。もともとはこの物語の語り手(つまりはベヒシュタイン)が洒落ただけだろう。
- (86) 神様をおぢやらかした Ließ den lieben Gott einen guten Mann sein. den lieben Gott einen guten Mann sein lassen は「(先)のことを考えずに)太平楽に日を送る」の意の慣用句。直訳「神様をお人好しにしておく」。
- (87) 堂堂たる髻をおぢ生やかしたので、ドイツとかポーランドとかどこぞの国会に現れても議員さんの資格は充分 Ließ seinen Bart stätlich wachsen, daß er ganz wahlfähig in irgendeinem deutschen oder polnischen Reichstag erschien. 十九世紀半ばには存在しないが、中世後期から近世初頭に掛けての両国の国会を指しているのか。議員諸公には美髯を蓄えているのが多かったのだから。
- (88) サムソン Simson. ユダヤの超人的に力の強い勇者。その怪力は生まれてから一度も剃られたことのない頭髮の中にあつた。情婦デリラにしつこくせがまれてその秘密を明かし、眠っているうちに髪を剃られ、敵のペリシテ人(ペリシテ人)に捕らえられる。旧約聖

- 書士師記二六章一七—一九節。
 (89) やどなし Schubut. 普通Schubutと綴る。罵言。惨めて汚らしい、物乞いのような人間。
 (90) 森の妖怪 Waldschrat. Waldschrat, Waldschratとも綴る。ゲルハルト・ハウプトマンの戯曲『沈鐘』(一八九六) Gerhart Hauptmann: *Die versunkene Glocke* では「山羊の脚、山羊の髯、頭に角の生えた森の精」と説明がある。これはギリシア神話の「サテュロス」・ローマ神話の「ファウヌス」のイメージであろう。
 (91) 中国の基準などをまだ超えて noch über das chinesische Maß hinaus. 中国の貴族・大官が指の爪を優雅に伸ばしたことはヨーロッパで過大に誇張された。
 (92) 戴勝 Wiedehopf. 仏法僧目戴勝科の鳥。体長約二六センチ。頭部に黄褐色で先端の黒い羽冠があり、自在に立てたり寝かせたりできる。背は暗褐色、翼と尾は黒い。ユーラシア大陸とアフリカに広く分布する。ドイツ語圏ではたくさんの異名、多くは俗称で呼ばれる。中には確かに「シュティンクハーン」Sinkhahn (臭鶏) がある。また「不潔な戴勝」とか「臭い戴勝」という中世の記事もある。
 (93) 廁 Retiraden. 「レティラーデ」Retirade は「便所」の婉曲表現。便所が建物の最上階にある、というのには頷けない。旅籠の宿泊客のおまる、つまり寝室用携帯便器を洗った後置いてある場所としても納得しかねる。どなたか「高教を」。
 (94) 黒黒と香蠟で固めた schwarze gewichst. 黒いコスメティック(蠟・牛脂・パラフィンなどに香料を加え練り固めた、髪・髯の形を調える化粧品)で調えられた。
 (95) ケルン水 kölnisches Wasser. kölnisches Wasser, kölnischwasser 水。フランス語で言えば「オー・ド・コロニー」Eau de Cologne、日本では訛って「オーデコロン」。この物語の舞台と思われる十七世紀にはまだ存在しない。イタリアのピエモンテ地方に生まれ、一七〇九年以降ドイツのケルンに定住し、小間物と香水を商ったヨーハン(ジョヴァンニ)・マリーア・ファリーナ(一六八五—一七六六)が発明した、とされる香水。製造法の秘密は彼の甥たちに継承されたが、その他にもたくさんの別の工場(一八一九年当時ケルンには六〇)が「ケルン水」を製造している。
 (96) 最高級のハバナ葉巻 Havannah-Cigarette. 煙草の葉を巻き、一方に点火して煙を吸う、という喫煙方法は、カリブ海の島島に到達したイスパニア人が先住民の間に行われているのを観察している。カリブ海最大の島で一五二一年から二十世紀初頭までイスパニア領だったキューバの首都ハバナの名を冠した葉巻は現代でもなお上物として有名だが、葉巻の喫煙という習俗がドイツ語圏に齎されたのは十八世紀初頭のこと、フランス軍によってである。この物語の舞台と思われる十七世紀にはまだ存在しない。ドイツ最初の葉巻工場は一七八八年シュロットマンSchlottmannがケルンに建てたもの。

(97) 居れり、立てり、去れり、臭えり war. stand, ging und roch. ユリウス・カエサルがローマの腹心に送った書簡にあったというポントス王に対する戦勝(紀元前四七)報告「ウエニ・ウイキ・ウイキ」veni, vidi, vici(来れり、見れり、勝てり)をもじている、と考え、こう訳した。女性のところに行った、立ち込んだ、引き上げた、臭った。

(98) グライフ鳥 Vogel Greif, グリフォン。ギリシア神話にある鷲頭・鷲翼で胴体は獅子の怪物。

(99) いろんな弁髪が何本もくっついていっている鬘まげを(普通男がやうするやうに) 後頭部でなく顔面に被っているこの怪物 den Ungetüm, das die Perücke mit den unterschiedlichen Zöpfen übers Gesicht trug, statt dem Hinterkopf. ルーパートは、髪も髭も伸ばしっぱなしなので、うちらも編みだしたのだらう。娘たちは、それを、奇怪な鬘を被っている、と考えた。頭髮に関するヨーロッパの風俗史で観ると、十七〜十八世紀においては中流・上流階級の男性は鬘を常用した。十七世紀ではくつろいでいる場合は髪をごく短くした頭でいて、人前に出る時には髪の長い鬘を被った。十八世紀には髪のかなり短い鬘に推移する。これはやがて地髪を(普通は) 後頭部で一本の弁髪に編み上げる髪型になる。

(100) イサベラ色 Isabellfarbig. イスパニア王フェリペ二世(一五五六―九八)の王女イサベラは夫であるオーストリア大公アルブレヒトがイスパニア軍を率いてオーステンデ(オーステンデ。オスタンド。現ベルギー北部の港湾都市)を占領するまで(この悲惨な攻囲戦―彼我両軍で八万の死傷者が出た―は一六〇一―〇四の三年間) 肌着を三年間も替えなかった、という。そこで淡黄色から黄褐色までの色をこう称する。

(101) 黒い衣装「喪服」を身に纏い Kleide sie sich schwarz. 死地へ赴く許婚者を送り出した許嫁と同じく、三年経っても相手が戻って来なければ、生涯貞節を貫いて喪に服そうという健全な覚悟を示したのである。

(102) さもないと唸るよ。おまえの未来の(亭主)もじゃもじゃ熊は sonst brummt er, dein zukünftiger Zottelbär. 気難し屋の夫は妻から「ぶうすか熊さん(唸り熊)」Brummbar と呼ばれる。

(103) 熊さん踊り der Bären Tanz. 熊に踊りを仕込んで、これを見世物にする香具師がヨーロッパにはいた。

結びに一言。

前回にも記したが、本稿は、同じく鈴木満訳・注・解題「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』(一八五七) 試訳(その二)」「人文学会雑誌」第四〇巻第四号、二〇〇九・三月)、「試訳(その二)」「人文学会雑誌」第四一卷第一号、二〇〇九・七月)、「試訳(その三)」「人文学会雑誌」第四一卷第二号、二〇一〇・一月発行)、「試訳(その四)」「人文学会雑誌」第四一卷第三・四合併号、二〇一〇・三月発行)と共に、西村淳子武蔵大学人文学部教授を代表とする武蔵大学総合研究所プロジェクト「ヨーロッ

パ人の外国語力格差と日本における多言語多文化教育」の一環となる「昔話ないし語りの言語教育的効果」考察に寄与する研究である。併せて、ほとんどKHMばかりをドイツ語圏のメルヒェン集として受容している点でそう断じ得る日本の国際交流の一方的性格と偏頗さの一つの証明ともなる。試訳は、本稿である「試訳(その五)」(『人文学会雑誌』第四二巻第一号、二〇一〇・七月発行)に次いで、「試訳(その六)」(『人文学会雑誌』第四二巻第二号、二〇一〇・十一月発行予定)で一応完成する予定で、(その一)、(その二)、(その三)、(その四)、(その五)を併せ全体としてこの研究を構成する。当該プロジェクトにご高配を戴いた関係各位および諸機関、代表としてこのプロジェクトを推進させておられる敬愛する同僚西村教授に心から御礼申し上げます。